



明德碑

長洲町に於ては「文化財保護委員会」が設けられ、文化財の発掘保存、及びこれが啓蒙に努めているが、当町の地理的環境により原始、古代、の遺物遺跡は見られない、僅かに駅前と腹赤新町に「貝塚」が存在するのみである、両貝塚共に縄文、弥生時代から古墳時代に亘る貝塚であると思はれるが、住家や道路敷の下に在り、調査不能の状態である。然し中世以後のものは伝説の地腹赤を中心に処々に点在しており、町にふさわしい解明と保存が必要である。

町民の福祉と町の開発により犠牲となった文化財もあり特に、慶長十二年構築の塩屋塘の中心としてこの堤防の潮止めと灌漑の役を果たしてきた眼鏡橋で唯一つ残存していた石橋の撤去と、旧長洲の馬場氏跡の庭園（天保年間改築の際の造園とみられる）の二つがあり時代の流れとは云へ惜しまれる。町指定文化財は次の通りである。

長洲町指定文化財

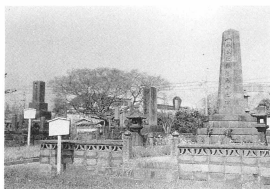
一、(1) 五輪塔（明德碑）

場所 長洲町下宝

種別 有形文化財（五十一年三月指定）



(御腰石)



遭難碑

(2)

明徳二年（一三九二）建立、水輪を台石上に積んであり、台石の記録は法華經の經文の一部である 後生安樂を祈念して建立  
六地藏石幢（右全日指定）

場所 右同、有形文化財

江戸時代初期の建立、中台を失いがん部は補修してあり記銘なし、  
国家安穩五穀豊穰を祈念したもの

二、遭難碑群

- 1 古憤改葬之奥津城
  - 2 海難碑
  - 3 救援隊並に遭難者の碑
- 場所 長洲町新山
- 種別 有形文化財、五十一年三月指定
- 1 寛政四年津波による溺死者を二丁目墓地に埋葬したものを明治四五年本地に改葬し昭和十四年追善碑を建立
  - 2 明治二六年の遭難者供養塔で町の建立である、月田道脉の拱文板碑あり、
  - 3 明治二八年町民三二人と救援隊七人の遭難追悼碑



新 塘

六、破魔弓祭(的ばかい)

潮堤である

寛文年間細川綱利の時築堤、その後補修を重ねた防

種別 有形文化財、五十一年三月指定

場所 長洲町大明神から清源寺に至る旧堤防

五、新塘

願した放牛が肥後の各地に建立したもので七十六体仏である。

種別 有形文化財、五十一年三月指定

場所 長洲町大字沖ノ洲字上沖洲

四、放牛地藏

帝の伝承と信じられてきた。 景行

種別 有形文化財、五十一年三月指定

場所 長洲町大字腹赤

三、御腰石

以上は漁業の町長洲の尊い記念碑である。



放牛地藏

場所 四王子神社

種別 無形文化財 五十一年三月指定

詳細については民俗資料に別掲

七、折地の「かいかい」人形

場所 長洲町大字折崎字折地

種別 無形文化財 五十一年三月指定

景行帝の伝承に始まった踊りと云われ人形の作り方は秘伝とされてきた、独創的な踊りである

八、腹赤天満宮の楽、神楽

場所 長洲町大字腹赤

種別 無形文化財、五十一年三月指定

景行帝伝承に始まったもの、笛、大鼓で奏し、十全、十全崩し、新壬、新壬くづし、の四階調より成っている。神楽には鬼神の舞がある。

九、清源寺天満宮の神楽

場所 長洲町大字清源寺

種別 無形文化財 五十一年三月指定

明治二九年に古式が復興されて以来保存会を中心に伝えられたもので、初剣、幣、二剣、四剣、神、歌、神楽、弓、矢、剣弓、地固め、等の型がある



ぼたもちさん



玉 藤

十、梅田天満宮の玉藤

植物の項に記載 五三年十月指定

十一、立花宗茂公夫人の墓（ぼたもちさん）

場所 長洲町大字腹赤

種類 有形文化財、五六年五月指定

戦国武将筑後柳川の初代城主立花宗茂の正妻さん千代が己が不遇に泣いて自ら命を断った地に建てられた墓碑

十二、長洲の嫁入唄

場所 長洲町大字長洲

種類 無形文化財 五七年十一月指定

江戸時代初期以来伝承された郷土色豊かな庶民の嫁入り唄で、独特の哀歎がある。

歌詞 親はどんなもの

柴茶にまよて ノンシコラ

知らぬ他村に 嫁にやる

アラヨカ ノンシノンシ



二百点余の関文書

十三、名石宮神楽

場所 長洲町大字沖ノ洲

種類 無形文化財 五一年十一月指定

明治八年四月に始められたもので会員五十数名で奉納され伝承に努めている、玉名市迫間（つしま）から伝へられたという。

ホッホ ヨカヨカ

ユウナカバッテン ドウシユウカイ

カンネンサ カンネンサイ

以下略

十四、関文書

場所 長洲町大字宮野七八六、関 保久（現在町中央公民館に保存）

種類 有形文化財、五八年四月指定

二百有余点の文書があり、荒尾手永、坂下手永、その他の物、庄屋として大きな業跡を残した「忠之充」とその一族による記録、文政より明治に至る七十年間の行政資料と手記である。

十五、六栄小学校の「ケヤキ」

植物資料篇に記載

（以上）

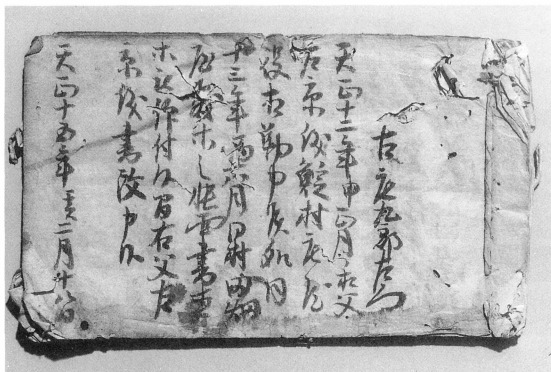
五名郡長洲町

| 国史跡<br>遺跡番号 | 国史跡<br>遺跡名 | 種別  | 所在地     | 指定<br>種別 | 備考(時代・遺物・文献等)    |
|-------------|------------|-----|---------|----------|------------------|
| 1           | 長平田神社跡     | 土 木 | 長洲新山    | 町        | 田浦田分水路           |
| 2           | 古墳交差の跡     | 跡   | 新 山     |          |                  |
| 3           | 遺 壱 跡      | 跡   | *       |          |                  |
| 4           | 新山墓地及び石碑   | 墓   | 長洲新山    | 町        | 海難墓碑             |
| 5           | 横田遺跡       | 包含地 | 横田・大森   |          | 縄文・土器・石器(本郷遺)    |
| 6           | 葛輪遺跡       | *   | 木島・葛輪   |          | 弥生・中世            |
| 7           | 東の前遺跡      | *   | 木島・東の前  |          | 弥生・土器            |
| 8           | 下赤田遺跡      | *   | 木島・下赤田  |          | 縄 文              |
| 9           | 百谷遺跡       | *   | 百谷・百谷   |          |                  |
| 10          | 飯坂遺跡       | 塔   | 長洲・宝河   | 町        | 古塔跡              |
| 11          | 宝河古塔群      | 塔 群 | *       |          | 六地蔵・石段五輪塔        |
| 12          | 手水会所跡      | 官 舎 | 長洲・西新町  |          | 駕馬手水             |
| 13          | 狭茶屋跡       | 狭 道 | 長 洲     |          |                  |
| 14          | 船崎貝塚A・B    | 貝 塚 | 横田・船崎   |          | 土器・弥生土・縄文中期土器・石器 |
| 15          | 福泉寺遺跡      | 寺院跡 | 木島・葛輪   |          | 中 世              |
| 16          | 信定寺石塔群     | 塔   | *       |          |                  |
| 17          | 西原敷遺跡      | 屋敷跡 | 宮崎・西原敷  |          |                  |
| 18          | 清原寺跡       | 寺院跡 | *       |          |                  |
| 19          | 止屋敷遺跡      | 屋敷跡 | 宮崎止屋敷   |          | 弥 生              |
| 20          | 赤田城跡       | 城 跡 | 向 野     |          |                  |
| 21          | 赤田のふんさん屋敷  | 屋敷跡 | *       |          | 弥・貝              |
| 22          | 光原寺跡       | *   | 宮崎・止屋敷  |          |                  |
| 23          | 観音寺跡       | 寺院跡 | 百谷・東原敷  |          | *                |
| 24          | 赤崎城貝塚      | 貝 塚 | 百谷・赤崎   |          | 中世・神祀とする         |
| 25          | 赤崎城跡       | 城 跡 | 赤崎・古城   |          | 中世・五輪塔2基         |
| 26          | 長洲塩田跡      | 製塩跡 | 新堀・新地   |          |                  |
| 27          | 清原寺上御堂跡    | 同 跡 | 清原寺・塔下  |          |                  |
| 28          | 清原寺寺地      | 寺院跡 | 清原寺・大文  |          | 中 世              |
| 29          | 柳川母公墓      | 墓   | 飯志小野四郎山 |          | 柳川宗茂公側方の墓        |
| 30          | 826 深田遺跡   | 包含地 | 飯志・深田浦  |          | 縄文・中世            |
| 31          | 柳島院寺跡      | 寺院跡 | 新 地     |          | 四国丸・陣内屋敷         |
| 32          | 827 飯志貝塚   | 貝 塚 | 飯志・善阿   |          | 縄 文              |
| 33          | 中洲塩田跡      | 製塩跡 | 上沖洲新地   |          |                  |
| 34          | 名 石 宮      | 拝殿跡 | 上沖洲古原敷  |          |                  |
| 35          | 稲志石倉庫      | 倉庫跡 | 上沖洲・新田  |          | 現 存              |
| 36          | 飯守地蔵       | 塔   | 上 沖 洲   |          |                  |
| 37          | 清原寺塩田跡     | 製塩跡 | 清原寺新地   | 町        |                  |
| 38          | 六堂小のケヤキ    |     |         |          |                  |









古庄九郎左衛門『覚書』

古庄九郎左衛門

天正十二年<sup>申</sup>正月私父

左京儀鱧村庄屋

役相勤申候処同

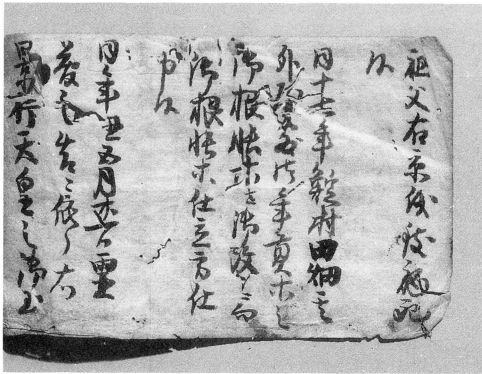
十三年<sup>酉</sup>六月同村田畑

屋敷等之帳面書直

等被仰付候間右父左

京儀書改申候

天正十五年<sup>亥</sup>二月十八日



祖父右京儀致病死候

同十七年鯨村田畑其

外屋敷御年貢等之

御根帳等を御改<sup>メ</sup>ニ而

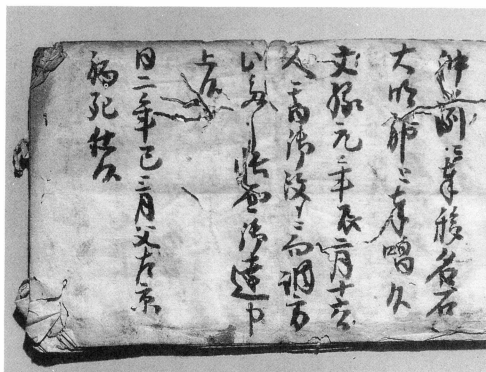
御根帳等仕立方仕

申候

同年<sup>丑</sup>五月廿一日靈

夢之告<sup>ニ</sup>依<sup>リ</sup>右

景行天皇之御玉



沖洲ニ奉移名石

大明神と奉唱候

文祿元年辰二月十六日

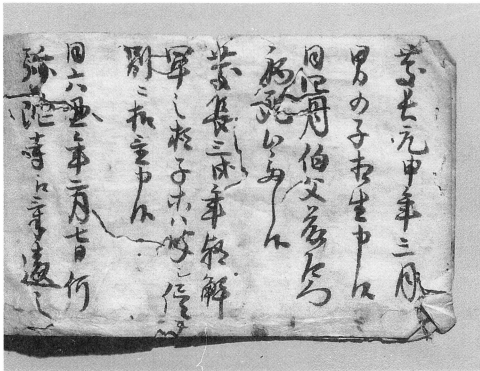
人畜御改メニ而調方

いたし帳面御達申

上候

同二年巳三月父左京

病死仕候



慶長元<sup>甲</sup>年三月

男の子相生申候

同四月伯父藤左衛門

病死いたし候

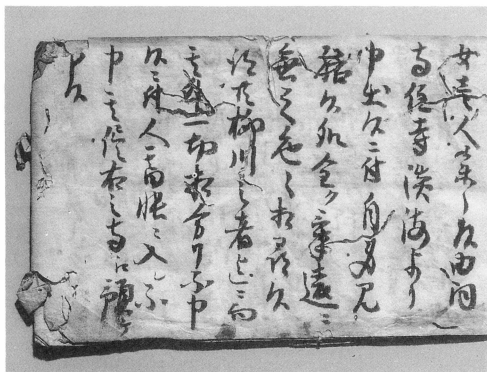
慶長三<sup>戊</sup>年朝鮮

軍之様子等ハ聞シ候ヲ

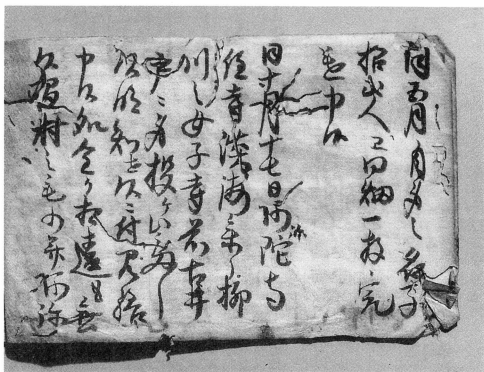
別ニ扣置申候

同六<sup>丑</sup>年二月七日阿

弥陀寺江氣違之

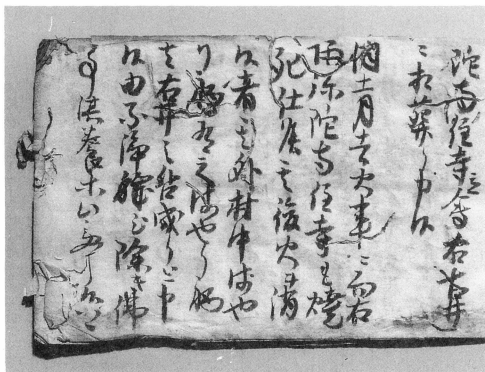


女老人參り候由 同  
寺住寺淡海より  
申出候ニ付自身見  
繕候処全ク氣違ニ  
無之色々相尋候  
得共柳川之者迄ニ而  
其外一切相分り不申  
候ニ付人畜帳ニ入レ不  
申其假右之寺江預ケ  
申候



同五月自身之名子  
拾式人<sup>エ</sup>田畑一枚宛  
遣申候

同十月十七日阿弥陀寺  
住寺淡海参り柳  
川之女子寺前古井  
戸<sup>ニ</sup>身投ケいたし  
候段知<sup>せ</sup>候<sup>ニ</sup>付見繕  
申候処全ク相違も無  
候間村之もの并阿弥



陀寺住立會右古井  
ニ相葬リ申候

同十一月十一日火事ニ而右

阿弥陀寺住寺も焼

死仕候其後火ヲ消

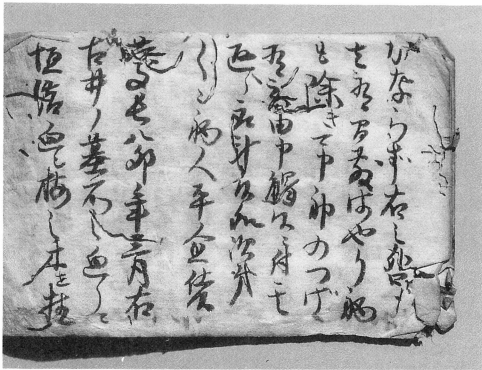
候者其外村中はや

り病有之はやり病

者右井之咎成りと申

候由不淨穢を除キ佛

事供養等いたし候ハ、



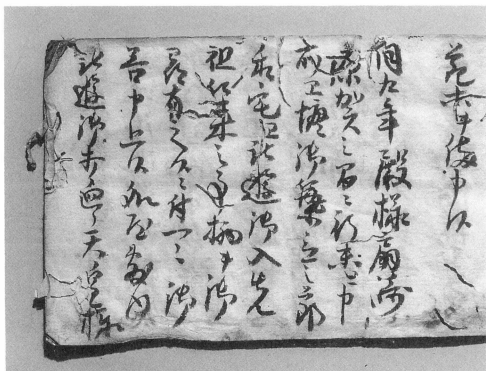
かならず右之咎メ  
ハ有間敷はやり病  
も除き可申神のつけ  
有之由申触候ニ付其  
通り取計候処次第  
／＼ニ病人平愈仕候

慶長八卯年三月右

古井之墓所之廻りニ

垣結廻シ梅之木を植





花等ヲ備申候

同九年殿様扇崎

原賀之間<sub>ニ</sub>行末<sub>ト</sub>申

所<sub>ニ</sub>塘御築立之節

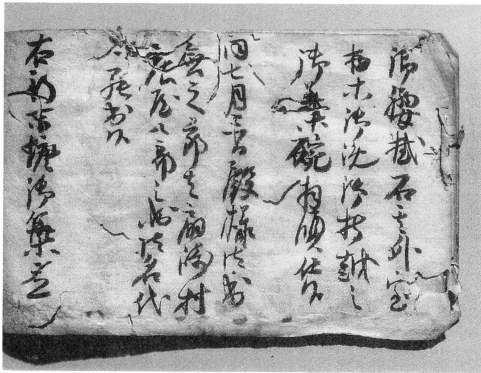
私宅<sub>ニ</sub>被遊御入先

祖以來之事柄<sub>ヲ</sub>御

尋有之候<sub>ニ</sub>付一々御

答申上候処屋敷内

被遊御打廻り天皇様



御腰掛石其外宝

物等御覽御持越之

御茶碗拝領仕候

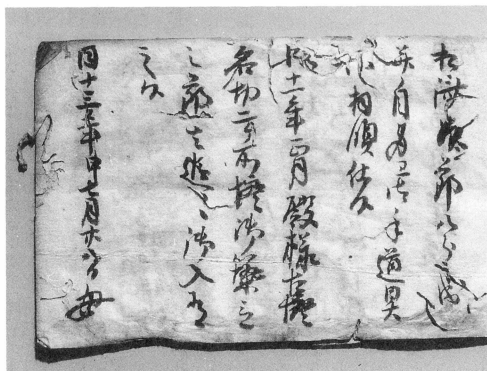
同七月三日殿様御出

無之節ハ扇崎村

庄屋八郎兵衛御名代

罷出候

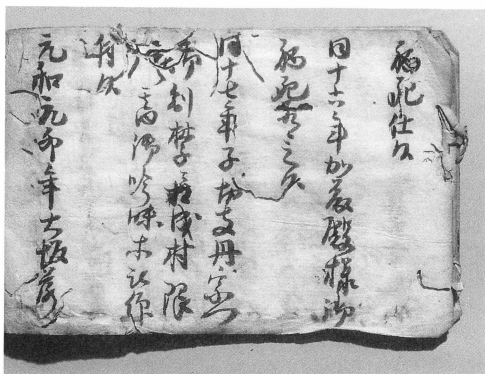
右行末塘御築立



相濟候節八郎兵衛  
并自身工御手道具  
等拝領仕候

同十一年正月殿様古塘  
名切二ヶ所塘御築立  
之節八追々御入有  
之候

同十三年<sup>申</sup>七月廿八日母

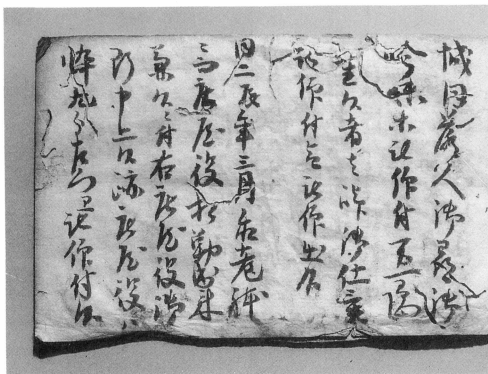


病死仕候

同十六年加藤殿様御  
病死有之候

同十七年<sup>子切</sup>支丹宗門  
御制禁<sup>二</sup>相成村限  
人畜御吟味等被仰  
付候

元和元<sup>卯</sup>年大坂落



城同落人御尋御

吟味等被仰付万一隠

置候者ハ屹<sub>下</sub>御仕置

被仰付旨被仰出候

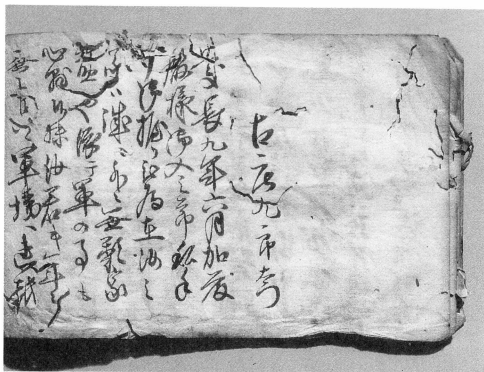
同二<sub>辰</sub>年三月私老躰

二<sub>而</sub>庄屋役相勤出来

兼候二付右庄屋役御

断申上候跡庄屋役ハ

悴九郎左衛門ニ被仰付候



古庄九郎右衛門

慶長九年六月 加藤

殿様御入之節私手

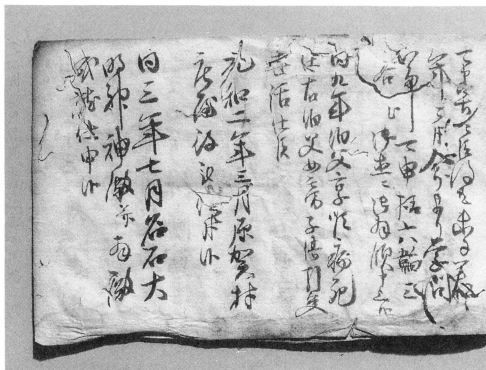
ヲ御握り被為在汝之

家ハ誠<sup>ニ</sup>外<sup>ニ</sup>無類家

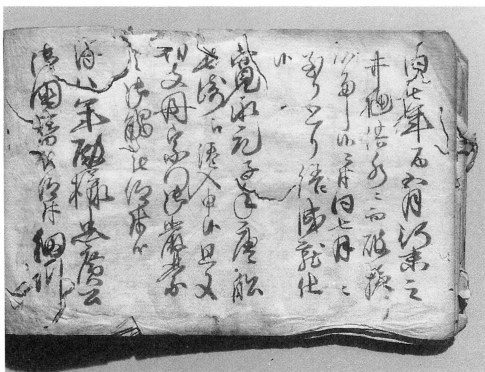
筋也依<sup>テ</sup>軍の事も

心懸候殊汝若<sup>キ</sup>年<sup>ニ</sup>

無之候ハ、軍場へ連越



可申筈ニ候得共末子若  
年ニ付今より学問  
いたし可申様六韜三  
略を御直ニ御拝領申上候  
同九年伯父享順病死  
仕右伯父女房子供引受  
世話仕候  
元和二年三月原賀村  
庄屋役被仰付候  
同三年七月名石大  
明神神殿并拜殿  
成就仕申候



同七年<sup>酉</sup>五月行末之  
井樋洪水<sup>ニ</sup>而破損

いたし候<sup>ニ</sup>付同七月<sup>ニ</sup>  
至りとり繕成就仕

候

寛永元<sup>子</sup>年唐船

長崎<sup>江</sup>湊入申候且又

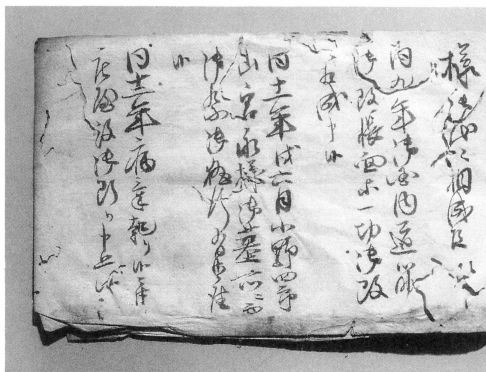
切支丹宗門御厳禁

之御觸被仰付候

同八年殿様忠廣公

御国替被仰付細川





様御代<sup>二</sup>相成候

同九年御国内通筋

御改帳面等一切御改

<sup>二</sup>相成申候

同十一年<sup>戊</sup>六月小野四郎

山宮永様御墓所<sup>二</sup>而

御祭御執行有御座

候

同十二年病气起<sup>り</sup>候<sup>二</sup>付

庄屋役御断<sup>り</sup>申上候



『荒尾手、永手鑑』

文政七年

浦野

玉名郡荒尾手永手鑑

申五月

利兵衛

一高 貳万千八百八拾壹石貳升七合八勺九才

物成 九千三百五拾八石六升五合三勺

内

千拾八石三升五勺三才

九拾壹石七斗壹升壹勺八才

内 百廿三石八升三合七勺六才

六百九拾三石壹斗八升六合五勺九才

百拾石五升

残受物成 八千三百四拾石三升

内

御藏納

御給知

受免下

荒地

田成畑反別下

三十ヶ年極歩下

物成割下

百九拾石七斗七升

猶殘 八千百四拾九石貳斗六升

外 八百石壹斗六升

内 五百八拾四石四斗壹升  
貳百拾五石七斗五升

内

九拾七石貳斗九升六合

殘 七百貳石八斗六升四合

合 八千八百五拾貳石壹斗貳升四合

一 高 貳万千八百八拾壹石貳升七合五勺九才

御土物成 九千三百五拾八石六升五合三才

高 四ツ貳分七朱六厘七毛九弗

受物成 八千三百四拾石三升

高 三ツ八分壹朱壹厘五毛三弗

御心付米坪拝領御免帳

内引被仰付候分

上ヶ米

御備米

新地方<sub>並</sub>諸開<sub>ニ</sub>懸分

御蔵納  
御給知

高 老万六千五百四拾四石六斗七升七合八勺貳才

田畑 千四拾九町七反壹畝貳拾四步

受物成 六千八百貳拾八石九斗六升七合八勺

米反 六斗五升

高 五千三百三拾六石三斗五升七才

畑畝 五百三拾六町貳反九畝廿七步

御土物成 千五百拾壹石六升貳合貳勺

米反 貳斗八升貳合

古新地

一 高 九百五拾八石壹斗壹合五勺

御土物成 六百貳拾八石貳斗七升九合貳勺五才

高 六ツ五分五朱七厘五毛四弗

受物成 五百七拾六石貳升

高 六ツ壹朱貳厘九弗

高 三百八拾八石町升八分

田 三拾五町九反四畝拾貳步

受物成 貳百三拾五石八斗八升貳合八勺七才

米反 六斗五升六合

高 五百七拾石五升三分五勺

畑 百貳拾六町五反三畝廿七步

御土物成 三百四拾石壹斗三升七合壹勺三才

米反 貳斗六升八合

一 高 百拾八石三斗八升六合壹勺

御土物成 七拾壹石八斗三升六合八勺三才

高 六ツ六朱八厘壹弗

受物成 六拾三石五斗九升

高 五ツ三分七朱壹厘四毛

御郡方

御山方

新地

高 八拾三石八斗四升貳合壹勺

田 八町三反貳畝拾貳步

受物成 五拾石七斗八升四合壹勺四才

米反 六斗壹升

高 三拾四石五斗四升四合

畑 七町八反五畝

御土物成 拾貳石八斗五合八勺八才

米反 壹斗六升四合

諸畝物

一 田畑 四拾四町貳反九畝貳拾四步

内 田 拾三町五反七畝拾八步

畑 三拾町七反貳畝六步

御赦免開

一 同 七拾九町四反貳畝廿七步

此米 拾四石貳斗九升七合貳勺貳才

内

田 拾五町九反壹畝廿四步  
畑 六拾三町五反壹畝三步

御開所

一同

百拾壹町五反七畝拾八步

内

田 五拾六町壹反五畝拾貳步  
畑 五拾五町四反貳畝六步

一 御山畝

八百三拾壹町三反三畝六步

一 御藪畝

拾八町三反五畝廿壹步

一 御藪畝

拾五町八反三畝拾八步

一 塩浜

貳拾町七反三畝九步

御本方

上納塩 六百六拾八石九斗八合六才

一同

貳拾壹町壹反貳畝三步

御郡方

同 五百六拾八石五升壹合五才



- 一 里数木 三ヶ所
- 一 商札 三百六拾九枚
- 一 廻船 百壹艘
- 一 船 百七拾貳艘
- 一 質屋 三拾七軒
- 一 造酒屋 五拾四軒
- 一 揚酒屋 拾五軒
- 一 濁酒屋 貳軒
- 一 綿弓 拾六張
- 一 井樋大小 三拾七艘
- 一 橋 拾三ヶ所
- 一 堤 貳百拾貳口
- 一 惣竈数 四千三百五拾軒
- 一 人数 壹万八千三百七拾八人

受免後新堤

御百姓家内

内  
男 九千八百八拾八人  
女 九千貳百拾人

禄受家内

一 人数 五拾壹人

内  
男 貳拾八人  
女 貳拾三人

一 馬数 貳千五百拾貳疋

外

一 人数 百八拾五人

内  
男 九拾八人  
女 八拾七人

寺社家内

一 同 四百六拾貳人

内  
男 貳百七拾四人  
女 百八拾八人

士席浪人格分より  
御惣庄屋直触迄  
右同

一 同 百八拾壹人

内 男 九拾壹人  
女 九拾人

一 油屋 貳拾壹軒

一 紺屋 貳拾三軒

一 御高札

但拾三枚懸り

一 右同

但右同

一 右同

但六枚懸り

一 浦香所

一 右同

一 右同

支配違右同

長洲町

大嶋町

岩本口

清源寺 勾坂平兵衛殿  
長洲町 牧寺次郎兵衛殿  
大嶋町 松田多物殿

外

高

拾石六斗九升五合四勺

長洲村

一、高

五百六拾石三升九升六勺

御土物成 三百三石貳斗七升壹合貳勺九才

高 五ツ四厘壹朱壹厘七毛八弗

受物成 貳百五拾七石六斗三升

高 四ツ五分九朱七厘三毛貳弗

高 三百拾五石三斗五升七合三勺

田 貳拾壹町六畝廿四歩

受物成 百六拾貳石五斗貳升貳合九勺壹才

米反<sub>二</sub>七斗四升九合

高 貳拾六石三斗九合五勺

田成畑 壹町九反貳畝拾貳歩

受物成 拾石五斗五合九勺八才

米反 五斗四升六合

高 拾石八斗三升九合八勺貳才

田成浜畑 七反七畝廿壹歩

御土物成 三石壹斗八合

米反四斗

高 貳石貳斗三升壹合三勺八才

田成屋敷畑 壹反四畝

御土物成 五斗六升

米反四斗

高 貳百五石六斗五升貳合六勺

畑 貳拾町貳反七畝廿壹歩

御土物成 八拾石九斗三升三合壹勺壹才

米反三斗九升九合

一、高 百四拾貳石七斗九升 古新地

御土物成 百貳石七斗九升五合壹勺五才

高 七ツ壹分九朱九厘四弗

受物成 九拾三石三斗六升

高 六ツ五分三朱八厘貳毛七弗

高 八拾六石七斗四升五分

田 八町壹畝拾八歩

受物成 五拾六石九升壹合壹勺四才

米反六斗九升九合

高 五拾六石四升五合

畑 九町貳反九畝拾五歩

御土物成 三拾七石五斗六升八合八勺六才

米反 四斗

一、高 拾七石七斗五升六合 御郡方新地

御土物成 六石九斗四升貳合四勺四才

高 三ツ九分九厘九毛壹弗

受物成 六石七斗三升

高 三ツ七分九朱貳毛六弗

高 貳石七斗七升八合

田 三反七畝廿七歩

受物成 壹石八斗八升壹合九勺七才

米反四斗九升六合

高 拾四石九斗七升八合

畑 壹町八反七畝廿七歩

御土物成 四石八斗四升八合三才

米反貳斗六升三合

一、畑 壹反四畝六歩

一、同 五畝拾貳歩

一、同 九町四反四畝廿四歩

一、田畑 貳町九反拾八歩

野開

諸畝物

浜成畑

御郡方諸畝物

内 田 壹町八反壹畝拾貳步  
畑 壹町九畝六步

一、釣漁船 九拾三艘  
一、貝取船 拾貳艘

一、同 四拾七町四反五畝拾貳步  
右同  
御開所

一、造酒屋 貳拾貳軒

内 田 拾五町六反三畝六步  
畑 三拾壹町八反貳畝六步

一、揚酒屋 八軒

一、畑 壹町八反四畝拾五步  
右同  
浜成畑

一、濁酒屋 壹軒

一、田畑 四町七反八畝九步  
御赦免開

一、井樋 八艘

内 田 三町六反五畝拾八步  
畑 壹町壹反貳畝廿壹步

内 築石井樋 貳艘  
灰石井樋 六艘

一、御山畝 九町拾五步

一、板橋 壹ヶ所

一、御藪 貳畝九步

一、堤 二口

一、受藪 七畝廿七步

一、竈数 八百三拾八軒

一、塩浜 拾貳町壹反七畝廿四步  
御郡方

一、人数 三千八百拾六人

此塩 三百五拾八石貳斗七升五合四勺八才

内 男 千八百七拾三人  
女 千九百四拾三人

一、商札 八拾七枚

一、廻船 五拾貳艘

一、馬数 四拾疋

一、引網船 四艘

長洲  
一、上御番人

宮脇彦左衛門

長洲町廻上番人支配

近藤 栄 八

本山弥太兵衛

松尾 亀 次

松尾又左衛門

永屋 太郎次

荒木 左助

河野 見寿

荒木源右衛門

西禅寺

西光寺

清台寺

三宝寺

松田丹後

社司

一、四王子宮

祭 四月十六日  
九月十五日  
社人 本田 近江

一、御目見医師

平橋 寿 玄

一、歩御小姓列

荒木 半兵衛

一、一領一疋

松隈 亀之允

一、地士

浦野 定助

戸泉 儀助

馬場 林助

平木 栄喜

浦野七郎右衛門

坂田伴右衛門

長洲御山見締

馬場助左衛門

水夫小頭

一、御郡代衆御直触

津横目 松崎儀兵衛  
庄屋

一、御惣庄屋直触医師

田宮 芝 琢

一、右同医師

用木 弘 順

一、右同

戸田 作 次

柿山 吉 次

浜崎 角兵衛

三原 勘兵衛

松本 和七

茂兵衛

一、御郡代衆御直触桑方受込 一木十右衛門

一、御惣庄屋支配 山本 宇兵衛

天保二卯年長洲上下引分ヶ被仰付候事

梅田村

一、高 三百六拾三石八斗八升九合九勺八才

抑土物成 百六拾石三升八合七勺貳才

高四ツ三分九厘七厘九毛九弗

受物成 百五拾五石壹斗六升

高四ツ貳分六厘三厘九毛貳弗

高 貳百五拾四石三斗九升三合六勺九才

田 拾八町三反貳畝廿一步

受物成 百貳拾三石八斗六升壹合六勺壹才

米反六斗七升五合

高 百九石四斗九升六合貳勺九才

畑 拾壹町九反貳畝九步

御土物成 三拾壹石貳斗九升八合三勺九才

米反貳斗六升貳合

古新地

一、高 壹石六斗四升六合五勺

御土物成 八斗九升壹合四才

高五ツ四分壹厘七毛貳弗

畑 三反五畝三步

米反貳斗三升貳合

一、畑 壹反廿壹步

一、同 壹畝廿壹步

一、田畑 五反五畝拾貳步

野開

諸畝物

御郡方  
右同



内 田 三畝拾五歩

畑 五反壹畝廿七歩

一、同 式拾四町九反式畝廿七歩 右同 御開所

一、馬 四拾九疋

内 男百五拾七人  
女百四拾九人

内 田 拾町四反四畝拾式歩

畑 拾四町四反八畝拾五歩

一、同 式反七畝拾八歩 御赦免開

一、高 千五拾三石九升五合

高濱村

内 田 式畝九歩

畑 式反五畝九歩

一、御山畝 式畝三反七畝廿四歩

受物成 四百四石式斗四升

一、受藪 四反五畝三歩

高三ツ八分三朱八厘五毛九弗

一、商札 式枚

高 七百八拾六石四斗三升八合四才

一、土橋 壹ヶ所

田 五拾壹町八反式畝拾五歩

一、堤 壹口

受物成 三百三拾五石三斗壹升八合式勺九才

米反六斗五升四合

一、竈数 六拾八軒

一、人数 三百六人

高 式百六拾六石六斗五升六合九勺六才

畑 式拾七町九反式畝三步

御土物成 六拾四石九斗式升壹合七勺壹才

米反式斗三升合

一、高 五拾六石八斗三升八合

古新地

御土物成 四拾壹石六升九合式勺五才

高七ツ式分式朱五厘六毛六弗

受物成 三拾三石七斗

高五ツ九分式朱九厘壹毛三弗

高 五拾石式斗三升壹合

田 四町五反七畝廿七步

受物成 式拾八石九斗九升式合七勺

米反六斗三升三合

高 六石六斗七合

畑 式町四畝廿壹步

御土物成 四石七斗七合三勺

米反式斗式升九合

一、高 壹石式斗八升壹合

御郡方 新地

御土物成 八斗式升壹合六勺九才

高六ツ四分壹朱四厘四毛四弗

受物成 七斗式升

高五ツ六分式朱六毛

高 九斗七升七合

田 九畝拾八步

受物成 五斗六升八合

米反五斗九升壹合

高 三斗四合

畑 五畝九步

御土物成 壹斗五升式合

米反式斗八升六合

一、畑 三反三畝三步

野開

一、質屋 三軒

一、同 三反六畝廿壹步

諸畝物

一、造酒屋 三軒

一、田畑 八反七畝六步

御郡方 右同

一、濁酒屋 壹軒

内

田 六反九畝廿壹步  
畑 壹反七畝拾五步

一、井樋 三艘

一、同 五町八反拾八步

右同 御開所

内

田 四町貳反四畝拾五步  
畑 壹町五反六畝三步

一、土橋 壹ヶ所

一、田畑 貳町壹反

御赦免開

一、竈数 百四拾八軒

内

田 壹町六反  
畑 五反

一、人数 六百三拾壹人

内

男 三百拾八人  
女 三百拾三人

一、御山畝 六町貳反九畝三步

一、馬 八拾貳疋

一、受藪 壹町五畝拾五步

一、二宮八幡宮 社僧 靈驗寺<sub>野原村</sub>

一、商札 六枚

祭日十一月十六日 社司月田喜一郎<sub>下尾村</sub>

一、綿弓 壹張

一、独礼 平木 次三太

一、地土 平木甚左衛門

一、御惣庄屋直触  
中 村 善之允  
和 吉

永方村

一、高八百六拾八石五斗九升八合

御土物成 三百五拾九石六斗九升三勺八才

高四ツ壹分四朱壹厘四弗

受物成 三百四拾八石八斗三升

高四ツ壹朱六厘壹弗

高 七百九石八斗貳升七合七勺七才

田 五拾町七反拾八歩

受物成 三百六石五斗貳升壹合九勺三才

米反六斗四合

高 百五拾八石七斗七升貳合三才

畑 貳拾町貳拾壹歩

御土物成 四拾貳石三斗八合七才

米反貳斗壹升壹合

一、高 四拾六石八斗五升七合

御土物成 三拾三石五升八合九勺五才

高七ツ五朱五厘貳毛八弗

受物成 三拾石貳斗九升

高六ツ四分六朱四厘三毛四弗

高 三拾三石貳升六合

受物成 貳拾壹石壹斗八升七合九才

米反六斗七升七合

高 拾三石八斗三升壹合

畑 四町三反貳拾四歩

御土物成 九石壹斗貳合九勺壹才

米反貳斗壹升壹合

古新地

一、高 壹石四斗貳升八合 御郡方 新地

御土物成 九斗九升九合六勺

高 七ツ

受物成 九斗

高六ツ三分貳厘五毛貳弗

田 壹反三畝拾貳步

米反六斗七升壹合

一、畑 六反壹畝廿七步

野開

一、同 四畝廿四步

諸畝物

一、田 六反八畝廿七步

御郡方

一、田畑 八町七反貳畝廿壹步

右同  
御開所

内 田 七町五反九畝九步

畑 壹町壹反三畝拾貳步

一、同 五反九畝九步

御赦免開

内 田 壹反八畝九步

畑 四反壹畝

一、御山畝 拾三町六反八畝廿四步

一、御藪 七反八畝六步

一、受藪 九反貳畝

一、商札 四枚

一、質屋 貳軒

一、灰石井樋 壹艘

一、堤 八口

一、竈數 百四軒

一、人數 四百拾四人

内 男 貳百八人  
女 貳百六人

一、馬 七拾六疋

一、三洲志津<sup>マツ</sup>廣殿家來

一、淨土真宗 信定寺

一、地土 北野定助

一、 築地吉平

一、 築地太助

一、御郡代衆直触 城戸才兵衛

一、右同御山見締

築地 監次郎

米反壹斗六升

宮崎村

一、高 拾六石三升貳合

古新地

一、高 六百三拾六石六斗三升壹合

御土物成 貳百六拾壹石六斗四升七合壹勺貳才

御土物成 拾石八斗八升貳合三勺七才  
高六ツ七分八朱七厘九九毛

高四ツ壹分壹朱

受物成 七石三斗七升

受物成 貳百五拾石三斗四升

高四ツ五分九朱七厘五弗

高三ツ九分三朱貳厘三毛八弗

高 拾五石五斗九升七分貳才

高 五百貳拾貳石貳斗五升貳合

田 壹町三反貳畝拾五步

田 四拾町七畝九步

受物成 七石九升八合壹勺貳才

受物成 貳百貳拾七石四斗六升八合貳勺

反五斗三升五合

米反五斗六升七合

高 四斗三升五合

高 百拾四石三斗五升九合

畑 壹反四畝拾五步

畑 拾四町貳反八畝拾五步

御土物成 貳斗七升壹合八才

御土物成 貳拾貳石八斗七升壹合八勺

米反壹斗八升七合

一、高 壹石四斗七升九合

御郡方  
新地

御土物成 九斗九升九合三才

高六ツ七分

受物成 八斗五升

高五ツ七分四朱七厘壹毛貳弗

高 壹石壹斗九升四合

田 壹反壹畝拾八歩

受物成 六斗五升九合五才

米反五斗貳升五合

高 貳斗八升五合

畑 九畝拾五歩

御土物成 壹斗九升九勺五才

米反貳斗壹合

一、畑 六反拾五歩

野開

一、同 貳反八畝拾貳歩

御郡方  
右同

一、田畑 四町八反七畝拾貳歩

御赦免開

内 田 三反貳畝拾五歩  
畑 四町五反四畝廿七歩

一、御山畝 九町三畝

一、御藪 貳反三畝八歩

一、受藪 三反壹畝三歩

一、商札 七枚

一、質屋 壹軒

一、造酒屋 壹軒

一、算井樋 壹艘

一、堤九口

一、竈数 七拾九軒

一、人数 貳百八拾三人

宮崎村  
分共  
同出目村

内 男 百四拾貳人  
女 百四拾壹人

一、馬 五拾壹正

一、内膳殿御家来

服部 伝兵衛

馬場 理助

石井 尉助

馬場 両右衛門

馬場 貞次

馬場 丙助

服部 喜藏

服部 貞右衛門

木戸 和助

石井 宇吉

馬場 理吉

受物成 七拾四石九斗八升

高四ツ六分壹朱七厘四毛

高 百三拾石八斗壹升四合

田 九町壹反貳畝廿壹步

受物成 六拾七石貳斗七升六合五勺五才

米反七斗三升五合

高 三拾壹石五斗七升壹合五勺

畑 三町八反四畝拾五步

御土物成 七石七斗三合四勺五才

米反貳斗

宮崎出目村

一、高 三石七斗壹合

新地

一、高 百六拾貳石三斗八升五合五勺

御土物成 八拾三石四斗六升六合壹勺五才

高五ツ壹分四朱

御土物成 貳石七斗貳升貳勺四才

高七ツ三分五朱

受物成 壹石八斗七升



高五ツ五朱貳厘六毛八弗

高 壹石四斗四升五合

田 壹反壹畝拾八步

受物成 貳斗壹升壹合八勺四才

米反壹斗八升貳合

高 貳石貳斗五升六合

畑 八反九畝廿壹步

御土物成 壹石六斗五升八合壹勺六才

米反壹斗八升四合

一、竈数 貳拾三軒

一、人数 六拾三人

内 男 三拾四人  
女 貳拾九人

一、馬 拾疋

一、長洲町西光寺弟子

惠教  
塩屋村

一、高 九拾五石三斗壹升五合

御土物成 三拾九石貳斗六升九合七勺八才

高四ツ壹分貳朱

受物成 三拾四石三斗

高三ツ五分七朱貳毛六弗

野開

御郡方諸開

一、畑 貳反七畝九步

一、同 壹反拾貳步

一、御藪 貳反三畝

一、受藪 貳反四畝三步

一、商札 壹枚

一、提 一口

高 九拾四石八斗九升壹合

田 四町五反

受物成 三拾三石七斗七升貳合五勺壹才

米反七斗五升

高 六斗貳升四合

畑 七畝廿四歩

御土物成 貳斗五升七勺九才

米反三斗貳升九合

一、高 貳拾七石八斗六升五合

永荒

御土物成 貳拾石八斗九升八合七勺五才

高七ツ貳分

受物成 拾八石八升

高六ツ四分八朱八厘四毛貳弗

高 貳拾六石五斗壹升

田 貳町五反三步

受物成 拾七石六升三合七勺五才

米反六斗八升

高 壹石三斗五升五合

畑 貳反七畝三步

御土物成 壹石壹升六合貳勺五才

米反三斗七升五合

一、田 壹反八畝拾八步

上<sub>リ</sub>開

一、田畑 三反壹畝拾八步

御郡方

諸畝物

内 田 三反壹畝六步

畑 拾貳步

一、同 三町三反七畝拾五步

石同 御開所

内 田 壹町五反六畝廿壹步  
畑 壹町八反廿四步

一、畑 四反三畝廿四步

右同浜成畑

一、田 壹町七反七畝九步

御赦免開

一、塩浜 貳町四反貳畝拾五步

御郡方

上納塩七拾壹石八斗四升六合三才

反貳石九斗六升貳合五勺

一、商札 壹枚

一、井樋 貳艘

内 灰石井樋 壹艘

笕井樋 壹艘

一、竈数 貳拾三軒

一、人数 九拾九人

内 男 五拾五人  
女 四拾四人

一、馬 拾六疋

一、高 六石貳斗三升貳合

御土物成 四石四斗貳升四合七勺貳才

高七ツ壹分

受物成 三石七斗

高五ツ九分三朱七厘九弗

平原村

高 五石七斗六升三合

田 五反七畝

受物成 三石三斗六升七合壹才

米反五斗九升

高 四斗六升九合

畑 六畝廿壹步

御土物成 三斗三升貳合九勺九才

米反四斗九升七合

一、畑 壹反四畝拾五步

浜成畑

一、同 貳町三反貳畝九步

新浜成畑

一、田畑 壹町四反

御郡方

諸畝物

内 田 壹町貳反拾八步  
畑 壹反九畝拾貳步

一、同 拾貳町七反六畝拾步

右同

御開所

内 田 八町四反貳畝拾貳步

畑 四町三反四畝六步

一、同 三町貳反四畝六步 右同 浜成畑

内 田 九反三畝廿壹步

畑 貳町三反拾五步

一、塩浜 貳町七反三畝拾八步 本方

上納塩 七拾六石七斗貳升貳合七勺六才

一、同 五町九反四畝拾五步 御郡方

同 百三拾六石六斗九升六合八勺四才

一、造酒屋 貳軒

一、井樋 三艘

□石井樋 壹艘

内 灰石井樋 壹艘

算井樋 壹艘

一、竈数 五拾軒

一、人数 貳百三拾壹人

男 百拾八人  
女 百拾三人

一、馬数 拾六疋

一、高 五百拾六石八斗三合

御土物成 貳百八拾七石三斗九升七合七勺八才

高五ツ五分五朱壹厘三毛六弗

受物成 貳百七拾四石九斗四升

高五ツ三分貳朱壹弗

高 三百三拾八石八斗七升三合

田 貳拾四町貳反四畝拾八歩

受物成 百七拾七石壹斗九升三合五勺八才

米反七斗三升

高 百七拾七石九斗三升

畑 拾七町九反九畝拾八歩

御土物成 九拾七石七斗四升六合四勺貳才

米反五斗四升三合

一、高 百三石四斗七升六合

御土物成 五拾五石八斗五升八合六勺壹才

高五ツ三分九朱五厘三毛壹弗

受物成 五拾四石貳斗貳升

高五ツ貳分三朱九厘八毛五弗

高 九石九升

田 八反六畝廿四歩

受物成 四石九合貳勺壹才

米反<sub>二</sub>四斗六升壹合

高 四拾八石八斗五升三合

田成畑 四町貳反三畝拾五歩

御土物成 貳拾貳石八斗六升三合貳勺

古新地

米反五斗三升九合八勺六才

高 四拾立石五石五斗三升三合

畑 九町七反八畝拾五歩

御土物成 貳拾七石三斗四升七合五勺九才

米反貳斗七升九合

一、高 五斗七合

御郡方

新地

御土物成 三斗五升壹勺七才

高 六ツ九分六厘七毛

受物成 三斗

高五ツ九分壹朱七厘壹毛七弗

高 四斗貳升

田 四畝拾五歩

受物成 貳斗三升八合貳勺三才

米反五斗貳升九合



高 八升七合

畑 貳畝廿七步

御土物成 六升壹合七勺七才

米反貳斗壹升三合

一、畑 七畝拾五步

野開

一、同 壹反八畝三步

諸畝物

一、田畑 壹町三反八畝拾八步

上り開

内 田 壹町三反貳畝拾八步  
畑 六畝

一、畑 八反七畝廿一步

浜成畑

一、田畑 七反七畝六步

御郡方

諸畝物

内 田 七反五畝六步  
畑 貳畝

一、同 八町三反九畝拾八步

右同

御開所

内 田 八町貳反壹畝三步  
畑 壹反八畝拾五步

一、田 貳反貳畝廿七步 御赦免開

一、受數 五反廿七步

一、塩浜 拾町四畝拾八步 本方

上納塩 三百四拾壹石四斗貳升九合八勺

一、同 六反三畝拾八步 御郡方

同 三石四斗五升六合

反五斗貳升三合三勺五才

一、商札 八枚

一、廻船 六艘

一、造酒屋 貳軒

一、掲酒屋 貳軒

一、綿弓 壹張

一、井樋 六艘

板井樋 貳艘

灰石井樋 貳艘

算井樋 壹艘

石井樋 壹艘

一、堤 三口

一、竈數 百九拾六軒

一、人数 八百六拾五人

内 男 四百三拾一人  
女 四百三拾四人

一、馬 七拾貳疋

一、御留守居中小姓 西川又左衛門

一、西川又左衛門育 西川夫左衛門

一、江村いの 触諸役人段 合志李

一、片山文寿 御郡代衆御直触手永見締役 渡辺次三

一、熊本明専寺弟子 惣 雲

一、泰勝寺支配 菊池 淳 朴

一、浄土真宗 立 徳 寺

一、清源寺上御番人 中西 卯兵衛

上沖洲村

米反四斗九升八合

一、高 七拾四石七斗六升五合

高 拾八石九斗四升

御土物成 五拾壹石壹斗三升九合貳勺六才

畑 五町五反六畝廿四步

高六ツ八分四朱

御受物成 貳拾壹石壹斗六升八合四勺六才

受物成 四拾五石六斗壹升貳合三才

米反三斗八升

高六ツ壹分七毛壹弗

畑 拾壹町六反貳畝九步

一、畑 貳反八畝廿壹步

野開

米反四斗三升九合

一、同 五畝拾八步

諸畝物

一、高 貳拾六石八斗九升三合

新地

一、同 貳町九反壹畝拾五步

浜成畑

御土物成 貳拾五石壹斗四升四合九勺六才

一、同 壹反九畝拾貳步

御郡方 諸畝物

高九ツ三分五朱

一、田畑 七反九畝廿壹步

御赦免開

受物成 貳拾四石七斗七升貳合七勺八才

一、御山畝 八反拾五步

高九ツ貳分壹朱壹厘六毛

一、塩浜 七町貳反五畝六步

古塩浜床

上納塩 貳百五拾三石貳斗三升九合四勺

高 七石九斗五升三合

反三石四斗九升壹合

田成畑 七反貳畝九步

一、同 壹町五反五畝拾五步

新塩浜床

受物成 三石六斗四合三勺貳才

同 四拾八石四斗五升壹合四勺

反三石壹斗壹升五合

一、商札 拾七枚

一、廻船 貳拾三艘

一、質屋 三軒

一、造酒屋 四軒

一、揚酒屋 壹軒

一、綿弓 四帳

一、灰石井樋 三艘

一、竈数 百四拾貳軒

一、人数 六百拾人

内 男 三百貳拾貳人  
女 貳百八拾八人

一、馬 四拾四疋

一、延寿寺支配

一、御留寺居御中小姓

一、名石宮社

祭日八月十三日

一、步御小姓列

一、諸役人段

一、一領一疋

一、地土

一、御郡代衆直触

古庄 常陸

関 忠兵衛

宮崎 彦四郎

岡村 喜兵衛

関 忠之允

古川三左衛門

松村 儀平

岡村 作之允

腹赤村

一、高 六百五拾七石八斗七升

御土物成 七百九拾七石七斗貳升貳合三勺八才

高六ツ四分五厘四朱五弗

受物成 三百四拾八石壹斗壹升

高五ツ四分九朱壹厘四毛七弗

高 四百四拾壹石七合九勺貳才

社司

古川 弥内

慈 般

田 三拾貳町六反七畝

受物成 貳百拾七石三升貳合三勺七才

米反六斗六升四合

高 貳百拾六石八斗六升貳合八才

畑 貳拾五町六反七畝

御土物成 百三拾壹石七升四合六勺三才

米反五斗壹升

一、高 百拾四石六斗七合

新地

御土物成 六拾貳石貳斗六升五合九勺八才

高五ツ四分三朱三厘

受物成 六拾石三斗六升

高五ツ貳分六朱六厘六毛九弗

高 拾石七斗貳升七合

田 九反九畝拾貳步

受物成 四石壹斗七升貳合貳才

米反四斗壹升九合

高 三拾貳石壹斗

田成畑 貳町七反九畝拾五步

受物成 壹石六斗八升四合三勺八才

米反四斗壹升九合貳勺四才

高 七拾壹石七斗八升

畑 拾町八反六畝廿四步

御土物成 四拾四石五斗三合六勺

米反四斗九合

一、高 三斗六升

御郡方

御土物成 貳斗三升四合

高六ツ五分

受物成 壹斗貳升

高三ツ三分三朱三厘三毛三弗

田 三畝拾八步

右同

米反三斗三升三合

一、田畑 壹町六反九步

上り開

内

田 六反九畝廿四步  
畑 九反拾五步

一、同 壹反四畝廿壹步

諸畝物

内

田 壹畝拾貳步  
畑 壹反三畝九步

一、畑 八畝拾八步

野開

一、同 壹町貳反九畝廿四步

浜成畑

一、同 貳畝六步

御郡方

諸畝物

一、田畑 三町四反四畝拾貳步御赦免開

内

田 壹町五反四畝廿四步  
畑 壹町八反九畝拾八步

一、御山畝 六畝六步

一、御藪 貳反貳拾壹步

一、受藪 七反壹畝廿七步

一、塩浜 貳町四畝

上納塩 五拾三石六斗五升貳合

反貳石六合三升

一、商札 三枚

一、質屋 壹軒

一、造酒屋 壹軒

一、揚酒屋 壹軒

一、綿弓 壹張

一、灰石井樋 壹艘

一、堤 壹口

一、竈數 九拾三軒

一、人数 四百貳拾六人

内 男 貳百三拾壹人  
女 百九拾五人

一、馬 四拾三疋

一、在宅御知行取

一、高瀬町光蓮寺支配

一、御郡代衆直触

岩 佐 土之允

持 木 順 民

藤本両右衛門

一、御郡惣庄屋直触

中尾 弥八郎  
惣左衛門  
中尾 政吉

畑 拾三町貳反四畝九步

御土物成 三拾貳石九斗四升八合八勺六才

米反貳斗四升八合

一、高 五百三拾六石九斗六升八合

折地村

一、高 三拾三石六斗九升八合

古新地

御土物成 貳百拾五石四升五合四勺

高四ツ四厘八毛

御土物成 貳拾五石貳斗五升七合六才

高七ツ四分九朱五厘壹毛貳弗

受物成 百九拾石五斗八升

高三ツ五分四朱九厘壹毛八弗

受物成 貳拾四石七斗貳升

高七ツ三分三朱五厘七毛四弗

高 四百五拾石六斗八升三合

田 貳拾六町七反三畝拾貳步

高 貳石五斗八合

田 貳反貳畝廿四步

受物成 百五拾七石六斗貳升壹合壹勺四才

米反五斗九升

受物成 壹石三斗貳升七合五勺四才

米反五斗八升貳合

高 百三拾壹石貳斗八升五合

高 三拾壹石壹斗九升

畑 六町貳反三畝廿四步



御土物成 式拾三石三斗九升式合五勺

米反三斗七升五合

一、畑 三反式畝九歩

野開

一、田畑 七反六畝

上り開

内 田 四反六畝廿壹歩  
畑 式反九畝九歩

一、畑 五反七畝拾八歩

御郡方 右同

一、畑 五反七畝拾五歩

右同 諸畝物

一、田畑 拾町五反五畝

御救免開

内 田 壹町壹反八畝拾式歩  
畑 九町三反六畝拾八歩

一、御山畑 四反九畝廿壹歩

一、御藪 式反八畝廿七歩

一、受藪 三反七畝拾八歩

一、商札 八枚

一、造酒屋 式軒

一、綿弓 壹張

高三ツ式分壹朱三厘九毛三弗

一、堤 六口

一、竈數 八拾五軒

高 貳百九石七升六合六勺五才

一、人数 三百五拾壹人

田 拾四町四反六畝廿四步

内 男 百八拾壹人  
女 百七拾人

受物成 七拾七石九合

米反五斗三升貳合

一、馬 四拾五疋

一、坂下手永安養寺支配 知旭

高 七拾八石八斗八升八合三勺五才

一、御郡代衆直触 宮崎茂助

畑 八町七反貳畝

宮崎両平

御土物成 拾石五斗四升壹合

一、御惣庄屋直触 両助

米反壹斗七升八合

赤崎村

古新地

一、高 貳百八拾七石九斗六升五合

一、高 壹石壹斗八升壹合

御土物成 百石貳斗壹升壹合八勺貳才

御土物成 八斗三合四勺八才

高三ツ四分八朱

高六ツ八分三厘三毛八弗

受物成 九拾貳石五斗五升

受物成 四斗四升

高三ツ七分式朱五厘六毛壹弗

高 七斗七升四合

田 六畝拾五分

受物成 壹斗五升五合壹勺

米反式斗三升八合

高 四斗七合

畑 壹反壹畝廿壹步

御土物成 式斗八升四合九勺

米反式斗四升三合

一、畑 六反六畝

一、同 壹反九步

一、同 壹町八畝拾式步

一、同 三町六反壹畝拾五步

一、御山畝 七反四畝拾八步

野開

諸畝物

御郡方

御赦免開

上り開

一、御藪畝 八反壹畝拾八步

高三ツ五分三朱壹厘七毛八弗

一、受藪 七反壹畝拾五步

一、商札 貳枚

高 貳百三拾貳石三斗九升五合

一、土橋 壹ヶ所

田 拾五町貳畝拾五步

一、竈数 四拾三軒

受物成 八拾壹石七升八合六勺壹才

一、人数 百九拾五人

米反五斗三升壹合

内 男 百人  
女 九拾五人

一、馬数三拾壹疋

高 百拾三石壹斗五升三合  
畑 拾三町四反九畝九步

一、御郡代衆直触 次座

宮崎熊八郎

御土物成 四拾石九斗六升壹合三勺九才

一、右同御直触<sup>而</sup>果候

城戸八郎助跡

米反三斗三合

向野村

一、高 四斗八升貳合

永荒

一、高 三百四拾五石五斗四升八合

御土物成 百貳拾五石八升八合三勺八才

御土物成 貳斗五升五合四勺六才  
高五ツ三分

高三ツ六分貳朱

畑 六畝六步

受物成 百貳拾貳石四升

米反四斗壹升貳合

一、高 五斗七升六合

御郡方

新地

御土物成 三斗八升三合六勺貳才

高六ツ六分六朱

畑 壹反九畝六步

米反壹斗九升九合

一、畑 壹町五反四畝廿四步

野開

一、同 五畝拾貳步

諸畝物

一、同 拾八步

御郡方

一、同 七反七畝拾五步

右同

一、同 三町貳反拾八步

御赦免開

一、御山畝 三町壹反四畝六步

一、御藪 八反六畝

一、受藪 三反四畝廿七步

一、堤 五口

一、竈敷 五拾五軒

一、人数 貳百四拾人

内  
女 男  
百拾貳人 百廿八人

(資料提供 山本卓也氏)

## 『馬場文書』

安永七年 長洲町

### 馬場十助辞世覚書

それ人一生は尽されども、希望は尽きすとの言の葉、実ことわりかな、即五七日風邪におかされ、昼寝かちの徒然、住事を思ふにかきりなき世に、限りある命のうち、農事にこころをよせ、希まほにも今や六十有六年無事に過しは身の幸イなり、左は有なから最いくはく年を経んとも覚束なく、あハれ辞世ともならむかしと斯く申置侍りぬ

### 農家の有様

- 一、 十三年ふりには難儀と申すほどの作並あり
- 一、 二十四五年ふりには難儀なる作並あり
- 一、 五十年程舊りには大難儀の作並あり
- 一、 世の風俗の替ル事も作並の通敷、諸事もかく有へき世なりとためして知りし老人もあり。是に尋よく聞く人は若年たりとも、頼母敷人なるへし
- 一、 四季のうち、暑中に潤繁くして残暑甚ま、寒中に暖にして餘寒強ければ、作物の出来よからず、不順なれば作物のミに限らず、万物同じことわりと詠メなから人もしかりとしミくとおもわさるは自身に

疎意と配へき歟。

一、享保年中に我九才より十一才まで三年高浜村へ居住の御浪人白石権右衛門殿師匠に頼、手習にかよい、彼所迄の道筋今通路致し見るに、僅半里に足りぬ道の作法や人の住居もかわり、野や山の模様もかわり、其頃生立有し山の老木は残り少なくなり、野は諸木生立ぬ、五六十年程旧りては、万ツの事もかわりぬるか、詠感するまま記置ぬ。

右白石権右衛門殿者

松倉長門守様御家中にて御知行式百石取となり、はしめの名字は大田也、此頃年齢九十才程と聞しなり。我下山の後<sup>チ</sup>七年の存生、然者<sup>た</sup>頽齡九十七才<sup>ニ而</sup>、死去、命日十一月二日、天明<sup>二</sup>壬<sup>五</sup>寅年<sup>二</sup>迨<sup>五</sup>五十四年<sup>ニ成ル</sup>歟

師の長寿を松になそらへ、北州の千年も終に尽ぬとかや、よつて師の石碑を題にして

雪積る 石碑は 松のしるし哉

天明<sup>二</sup>壬<sup>五</sup>寅年<sup>二</sup>十一月 馬場十助

一、享保年中の頃までは、長洲<sup>江</sup>今のやうに温飩蕎麥切或は鮓<sup>スレ</sup>など拵へ、町筋売歩<sup>アルク</sup>行見世とては、一軒もなし、素麵は拵へ売候家一二軒歟ありしなり、扱大綱として人数二十人一組として三十年己前より追々<sup>ニ</sup>に今十三組の出来、年により勝手のやうに申せとも、漁方<sup>サシ</sup>さして甘方<sup>クワロキ</sup>にも見へす、時節につれては、世渡<sup>ル</sup>わさまでもかわりけるは、是非もなきものは、扱又其頃の塩浜のうちや田方のうちの今島作りになりしは、潮行や水の流<sup>レ</sup>までもむかしにかわりける歟。当所<sup>ト</sup>一邑<sup>チ</sup>さへかくかわりけるは、時代



に連しての事歟。然者五六十年のうちには、万事ともに変化するゆへ、浮世と申歟。天明年中より後年に至りなは、折ふしの又いかにと歟かわるへき、かくなる理りしかと知らぬ。凡下の心としてはかくこそ咄つれ

常盤木に世のさたを似り見たし

## 農時記

- 一、大豆 春の彼岸おわりて五日程過作りて吉
- 一、小豆 右同断
- 一、唐芋苗 春の彼岸おわりて十日程過ひせて吉
- 但、むし苗は餘寒強からされは、彼岸のうちにふせてよし
- 一、種粃トウモロコシ 八十八夜廿一日程前にかしてよし
- 但漬場は八十八夜十一日程まへにかしてよし
- 一、田植 種蒔四十日程過植てよし、但し五月の節に入五日程過植へてよしと知るへし、但し植て十四日めより草とり初めてよし、但し植て百日程過収納と知るへし、水損日損、虫痛の年は、十日程収納遅速あり
- 一、砂原粟蒔 夏の土用に入十日程まへに蒔てよし但し蒔て百日程して収納と知るへし、日痛などの年は五七日ほど収納遅速あり、蒔て九日、十日めより草とり初めてよし

- 一、牟田粟蒔 夏の土用<sup>二</sup>入三日程まへに蒔てよし、但し九月の節に入り七日程過て収納と知るへし
- 一、田小麦 秋の土用入頃より蒔てよし
- 一、島小麦 秋の土用過頃より蒔てよし但し五月の節に入三日程前に収納と知るへし雨又は何角<sup>ト</sup>痛の年は五七日程収納遅速あり
- 一、田大、麦秋の土用中頃より蒔てよし
- 一、島大麦 冬の節<sup>二</sup>入十日程過蒔てよし、但し四月の節に入五七日程過収納と知るへし、雨廂の年は、五七日程収納遅速あり
- 一、夏豆 秋の彼岸中頃より作りてよし収納は五月の節に入りてよし、但し、地味能畑は早粟収納跡にもよし
- 一、菜種苗 秋の彼岸頃には種々の作り物多し、心懸<sup>ケ</sup>てよし
- 一、唐芋掘 冬の節に入十日程過掘てよし、但し十日の中までに掘仕舞てよし
- 一、木綿<sup>きわた</sup> 大豆作り仕舞て後<sup>チ</sup>作りてよし、但し草さらへは田うへ仕舞粟蒔まへによし、はやく草さらへ致してはわろし。
- 一、苜・大根・茄子・葱<sup>ねぎ</sup>・芥子<sup>カラシ</sup>・紅・たはこの類は遺料<sup>つかりよう</sup>程作りてよし芥子は秋の彼岸のうち、彼岸過に蒔、五月節<sup>二</sup>入取つてよし
- 一、牛房 師走蒔置てよし正月蒔てもよし
- 一、作り物は田島共に夏秋<sup>ニ</sup>タ毛作りてよし、三毛作仕合せになる年は希にあり、三毛作り候得者手入の

賃、やしない代引かへはさして為にならず、二タ毛を手入し厚クするにしかす

一、 田の畔は、春の土用中頃さめてよし

一、 七嶋しつとは春の土用過植てよし苗はそのまへに取置へし

作並十箇年程ためしては

二年 十分 合二十分

五年 七分 合三十五分

三年 五分 合十五分

合七十分

是を十箇年に配すれば、一年に七分宛の収納と心得てよし

十分の作並と申年

大概

上田 壹反<sup>ニ</sup> 十俵程

中田 八俵半程

下田 七俵程

合二十五俵半

是を三反に配すれば八俵半宛、是十分の作並なり、但し手入<sup>レ</sup>の厚簿やしないの多少により上中下田とも  
もに同しやうに出来<sup>ル</sup>年もあり十分の作並には上中下田共<sup>ニ</sup>都<sup>而</sup>十俵程宛出来<sup>ル</sup>と心得てはおほきに相

違なり

七分の作並と申年

上田 老反<sup>二</sup> 七俵宛 中田 六俵宛

下田 五俵宛 合十八俵

是を三反に配すれば六俵宛なり、是七分の作並なり

一、 麦作は田畠ともに実少し十箇年程ためしては六分程の作並にも当ルへき歟

一、 田に虫入りの年 魚の油を入レ虫除事は宝曆の初メの頃より人皆よく知れり、其己前はしらす此こと

何れの人数へしといふことを聞ず、安永<sup>戊</sup>七年<sup>迄</sup> 三十年余<sup>二</sup>成

一、 唐いもは享保年中の頃、天草より初めて長須辺に参候得共、其頃迄は何角に喰イ合せありとて容易に

は喰わす元文の頃少々宛、彼地より参候を調食<sup>イ</sup>、寛延年中より糧米の助けになることをよく知りそ

れより年々人皆作りひろまれり享保元<sup>丙</sup>年<sup>より</sup>安永八<sup>己</sup>年<sup>迄</sup> 年数合、六十三年<sup>二</sup>成

一、 享保元<sup>丙</sup>年<sup>此頃より</sup>三池御領石すミ掘初<sup>メ</sup>なり天明八<sup>戊</sup>年<sup>迄</sup>七十三年<sup>二</sup>成

一、 入用の農具は冬春の内に何として用意致置へし、左なければ、其時にむり手間多し

右者 長洲に産して仕覚たる通を書置ぬ

田面を賛して

見て楽は 秋の田面に しくもなし

秋作や 何角で いたむ年なくハ

世の事は 皆月潮の盈干かな

安永七<sub>戊</sub>年八月十六日

馬場十助書

## 覚

### 一、 粮米拵時

春は二月の節下旬頃

夏は、拵ざるやうに用意してよし、草刈時分なればなり

秋は、七月の節中旬に

冬は十一月の節上旬に

一、味噌醬油の麴は夏の土用入より拵置てよし、但し醬油は、夏の土用に仕込てよし、味噌は、秋の収納まへに搗てもよし、此節、茄子瓜を漬けてよし、酒のかす漬は、夏の土用に漬てよし、大根漬は、十一月の節中に漬けてよし、此節過候而者筋立よろしからず。

一、農家粮米は、粟、大麦の類搗候而、七歳より以上老人まで、一日に五合宛、是一ヶ月二ヶ月ためしては知られず、一年ほども撫候得者、右之通用意してよし

一、味噌は一月に壱人まへ六勺ほど宛、一年に式斗壱式升用意致してよし

一、酢や醬油は家に應<sub>セ</sub>ざる飲食を好<sub>メ</sub>は多く入るなり

一、秋の夜藁すぐりは、一人宛に七十五手、是一<sub>ト</sub>夜仕事に極てよし、但し五手結にして十五把なり

- 一、冬春の一ト夜仕事繩は、わら一ト手、たわらは式俵これ傭人仕事、大概かく心得てよし
- 一、女中は此仕事を致スうちにも種々の手入り出来ぬれば、其時〳〵に準じ見量はからうてよし
- 一、屋ね葺替、壁繕などは、春の彼岸過頃よりよし
- 一、縄俵の類は、冬春の内に拵へ置へし壁土なども寄置てよし
- 一、唐臼とこすは秋の彼岸まへに作り置へし
- 一、糶摺は、九月十月麦蒔、雨天の時分摺てもよし、但し男女五人手合イ候得者、一チ昼夜に傭人ニ付米七斗五升出来ルなり
- 一、大麦やはだか麦には、壱斗に白灰壱合五勺宛入置候へは虫や鼠付かす、搗麦に入レ置ても味もかわらざるなり
- 一、粟の米に入置候而者炊節ぢぢ手間取なり
- 一、米や小麦、其外糠ぬかを取ル穀類に白灰入置候而は、糠用ひられず、俵のうへにふり置候得者、虫鼠喰イの損失少し、然共持扱の節、五味立候ゆへ、雇人などはきらふなり
- 一、蔵の壁土は瓦下タ迄壱坪に馬七駄宛に寄せ置候得は、塗仕舞まで余ル程有ると知るへし
- 但し此外に中塗の砂やすさ用意致置へし中塗之節、赤土と砂ませ合か壱斗に干すさ懸目か百八十め程入ルと知るへきなり
- 一、梅干は五月の節の中漬置、六月の節中に干てよし、但し梅の映方つ次第年により二三日の漬時遅速あり

「旧事記」

長洲町 馬場十助

一、長洲江人の住はしめは、扇崎村より宗海・道了・道甫と申ス入道三人永曆元年八月廿三日移りはしめしとなり。

延宝九<sup>辛酉</sup>年<sup>迄</sup> 五百二十年<sup>ニ成</sup>

安永八<sup>己亥</sup>年<sup>迄</sup> 六百十八年<sup>ニ成</sup>

長冽ハ往昔 泣洲<sup>ナカスガハツ</sup>泣 泣不泣又千鳥浜と申所なりと云伝しなり。

一、慶長六年須崎大明神松御植被成候

安永八<sup>己亥</sup>年<sup>迄</sup> 百七十九年<sup>ニ成</sup>

一、慶長十二年長冽古塘築

安永八<sup>己亥</sup>年<sup>迄</sup> 百七十二年<sup>ニ成</sup>

一、慶長十三年長冽松原の松御植接<sup>つぎ</sup>

安永八<sup>己亥</sup>年<sup>迄</sup> 百七十二年<sup>ニ成</sup>

一、寛永十二年之頃

長須村庄屋、源石衛門 <sup>是</sup>与次兵衛殿父なり

同村 庄屋 惣右衛門 <sup>是</sup>今の何某が先祖にて候哉委ク不知

此頃之御惣庄屋 荒尾弥左衛門殿

寛永元<sup>甲</sup>年<sup>子</sup>安永八<sup>己</sup>年<sup>亥</sup>迄、年数合百五十六年<sup>二</sup>成、右證跡書、過去帳<sup>ニ</sup>はり付置

一、元和元<sup>乙</sup>卯年先祖与次兵衛生<sup>レ</sup>候

延宝九年酉ノ九月十七日 死去 年六十六

此子孫は過去帳<sup>ニ</sup>記置

享保十五<sup>庚</sup>年<sup>戌</sup>迄 五十年<sup>二</sup>成

安永七<sup>戊</sup>年<sup>戌</sup>迄 百年<sup>二</sup>成

一、寛文四<sup>甲</sup>年<sup>辰</sup>秋長洲新塘築

此節<sup>之</sup>御郡奉行 塩山牛右衛門殿

御惣庄屋 荒尾弥左衛門殿

(付紙)「長須新塘築

寛文四年辰年八月<sup>ノ</sup>取懸り同年十月<sup>ニ</sup>成就

御郡奉行塩山牛右衛門殿寛文四年之春御郡奉行被仰付<sup>レ</sup>

安永八<sup>己</sup>年<sup>亥</sup>迄 百二十九<sup>年</sup>成

一、松平大炊頭様寛文九<sup>己</sup>年<sup>酉</sup>丹波国福知山より肥前嶋原<sup>江</sup>御越被遊候、此節長須<sup>多比良</sup>江御着船、土黒<sup>江</sup>

御宿被遊候御渡海は肥前佐賀之殿様<sup>ノ</sup>二艘参申候、此節彼方様<sup>ノ</sup>御知行取家御出被成候、御名之所虫

喰不相知、寛延二<sup>己</sup>年<sup>巳</sup>迄八十一年<sup>ノ</sup>め<sup>二</sup>宇都宮<sup>江</sup>御越被遊候。

一、元禄十六年<sup>癸未</sup>年十一月五日亥刻より寅刻迄出火、此夜風烈<sup>ク</sup>長須町家不殘焼失



(加筆) 「但し下本町江有之候御茶屋ともに」

安永八<sub>己</sub> 亥年迄七十七年<sub>二</sub>成

一、享保十二年未正月長洌上<sub>ミ</sub>山墓所に上本町武助・幾右衛門葬り武助・幾右衛門祖父次郎兵衛初メ申候

安永五<sub>丙</sub> 申年迄 五十年<sub>二</sub>成

一、享保十七<sub>壬</sub> 子年秋日本国中田虫腐よつて翌春丑春迄大飢饉此年穀類旅出稠敷御法度なり。

此秋七月六日、田面を見るに少々出穂もあり痛毛まひとひに見へしが、それより日<sub>ミ</sub>に痛まさり、同廿日頃になり、青<sub>ミ</sub>ある田は希に見へしなり。

此頃までは、田に鯨の油を入レ虫除<sub>ケ</sub>事知りたる人なし。

九洌之内にては肥前之御領洌<sub>而</sub> 飢死の人多し、家財衣類を賣、糧米の代<sub>ト</sub>ス、子の冬より丑の春迄。

黒米 壹升 代九十三文より百文まで

も<sub>ミ</sub>粟 壹升 代六十二文より七十文まで

雜穀之類、右之直段に準し高直なり。

此節粟の搗糠壹升三四文に、調糧米の助<sub>ケ</sub>とは大難儀の程、これにて思ひ知るへし、此節までは、大豆は、糧米の助<sub>ケ</sub>になる事をしらす。

丑の春加賀米として五斗式升入、隣国の商人少々宛借来りしを調しけり。

此頃 銀壹匁は八十文替、錢壹文は八十文遣。

安永八<sub>己</sub> 亥年迄 四十八年<sub>二</sub>成

一、享保十七壬子年秋、御国は畠作九分程の出来にて畠作御百姓は大難儀なし、無高の人は大難儀。よつて御救米被下候得共、間には飢死したる人もありしなり。

一、享保十八癸丑年秋、田畑共十分の出来なり。

此秋何国も豊年と聞しなり、依之三斗七升入之。

米壹俵 代壹貫貳百九十五文、雑穀は是に準し、下値なり。

享保二十一年三月十四日改

一、長冽町人高 男女 三千百三十七人

一、元文二丁巳年十二月廿四日戌半刻より子半刻迄出火上今町、東平、廣丁まで表口家二十軒程焼失

一、元文四己未年 長冽御山之内 東平江松植ル

安永八己亥年迄 四十一年二成

一、松平吉十郎様寛延二己巳年夏從肥前嶋原下野国宇都宮江御所替被為蒙仰候、御家中様者己の九月より午の春迄御引越被成候。但し委敷ことは、別の帳面に記あり。

一、宝永二乙酉年春居宅建

(加筆) 宝曆九己子年迄六十四年め二類焼

一、宝曆九己子年正月三日亥上刻より丑半刻迄出火

上今町、西平、上本町まで表口家数四十軒程焼失

此時私宅も類焼申候、宝永二乙丙より六十三年めなり

一、宝曆十<sup>庚</sup>丑年二月十七日 居宅建<sup>ル</sup>

棟梁 清源寺村 彦三郎

同村 伊三郎

同村 清右衛門

長須町 仁左衛門

一、明和元<sup>甲</sup>申年三月十日亥刻より子刻迄出火、下今町西平表口家数十二軒焼失

一、松平大和守様安永三<sup>甲</sup>午年夏従下野国宇都宮御旧領肥前嶋原<sup>江</sup>御所替被為蒙仰候、御家中様午十二月よ

り未春迄御引越被成候 委敷ことは、別の帳面に記あり。〈寛永二<sup>己</sup>己年〆安永三<sup>甲</sup>午年迄年数二十六

年めなり〉

一、安永四<sup>己</sup>未年閏十二月十七日蔵建<sup>ル</sup>

棟梁 清源寺村 伊三次

同村 傳藏

野原村 宇佐衛門

長須町 仁左衛門

一、古蔵は享保の年はしめ頃建となり

(加筆) 此蔵寛政四<sup>壬</sup>子年四月朔日津浪<sup>ツイクチ</sup>ニ崩<sup>ル</sup>也

一、安永八<sup>己</sup>亥年二月七日戌半刻より亥下刻迄出火、大明神表口家十一軒程焼失

一、安永八<sup>己</sup>亥年十月廿一日 亥上刻より丑半刻まで出火、上本町、磯町、西町表口家百二十軒程焼失

一、安永八<sup>己</sup>亥年長須東山松跡に居屋敷の願濟

御郡代 井澤慶助殿

御惣庄屋 荒尾寿右衛門殿

御山支配 古沢三津右衛門殿

長須町庄屋 惣右衛門

○是よりおくに記しあるは、思ひ寄る時々記し置候へは年号前後に記しあるも不審と見るべからず。

一、享保十七子の年より翌年迄、はしか病犬多く人或は牛馬に喰い付、人牛馬等数多死す。此頃迄は此療治委敷知る人なき歟。薬用致しても療治不叶、傷口愈<sup>エ</sup>ニても二十日或五十日過と風病出し乱心のやうになり死せり。宝曆のはしめの頃より、此の療治委敷知る人ありて早速此療治致し候者、死人なし、尋寄り頼へし、犬牛馬の肉をおほく喰<sup>イ</sup>候得者、はしか病のやうになるよし申傳ふなり。

一、四王子宮は景孝<sup>マツ</sup>天皇の皇子四人を祀り奉りしなり。右宮<sup>江</sup>正月元朝<sup>ニ</sup>鏡餅三ツ先祖より毎年上<sup>ケ</sup>来れり、是をよりにして御神体四人<sup>三冊</sup>在けるにや、近代拜せし人なければ不審、但し御神体は、三体在<sup>ス</sup>よし申傳へしなり。

檜垣の集に

四王子山を題にして

老ぬれは年<sup>ハ</sup>かくして在ぬへし

しおうじ山の人に見ゆれば

(加筆)

「一説には、筑前の国、しおうしの嶽より御来臨マク在ませしと申傳へなり。大宰府今半里程北に白王子村あり、御笠郡の内なり。此村の氏神の額に白王子宮とあり」

毎年七月十五日の朝

宮江御供を上ケける節の配膳左之通

御供

御染三ツ

白米三合

黒米六合

神酒徳利壹つ

拝殿

十筋  
由舞章  
和之製

長  
下  
一  
二

戈兵衛  
請次郎

志そ  
すあへ  
ひしき  
とうふ  
なすひあへ

一、寛政二かのへ 戊年 座敷建ル

清源寺大工 伊惣次

惣助

彦助

次七

沖須村 次八

一、寛政六癸 寅年六月上旬藏建ル 此藏高浜合 求ル

清源寺村 大工 惣助

同 村 大工 辰右衛門

沖須村 大工 次七

一、名石大明神ハ景孝マツ天皇往昔腹赤村に祀り奉しを近代沖洲に遷し奉りしとなり。此時腹赤にて焼し鯛を上ケ奉りしゆへ腹赤焼と云へり。井澤の集に是をニベの魚かとあり。同じ集に肥後の国墨摺山や硯川、長洲腹赤は浦続きなり。八代不知火の起りも此時と云へり

一、四王子宮祀り奉しはしめを檜垣の集トキの齋をもつて時代を勤ふれば長洲へいまた人の住ミはしめる以前よりと見えたり、長洲へ人の住ミはしめは永曆年中とあり

天明二壬 寅年九月

両奉行所<sup>の</sup>之御書付并御郡代衆中<sup>の</sup>御触之添書左之通。病死之者二日二夜之内に者よみかへり候者稀に有之事に候、既に今度合志郡久米村之者五十四歳之男大病相煩之処二先月晦日之晚致病死、翌朔日之夜葬候節<sup>ニ</sup>至りよみかへり追<sup>レ</sup>腹葉にて弥蘇生相成候、然<sup>レ</sup>処<sup>ニ</sup>當時下方之風俗にて病死之者、早速不相置候得者、其家者不及申、脇々<sup>の</sup>茂不埒之様<sup>ニ</sup>相唱候<sup>ニ</sup>より、しきりに差急<sup>さし急</sup>候儀甚心得違之事<sup>ニ</sup>候条、以來取置不差急、時刻考葬候様可示置事

九月廿六日

御奉行中

玉名御郡代衆中

蘇生之者之儀<sup>ニ</sup>付而御達之趣写之沓通差越候条、被得其意、下方不洩様可有御達候、寺社御家人中<sup>江</sup>者手永又不洩様可通達候以上

九月廿七日

玉名御郡代中

玉名 御惣庄屋中

一、宝曆八<sup>戊</sup>亥<sup>亥</sup>年秋作よろしからず、翌子の春三斗七升入米沓俵代、貫貳百文程雜穀是に準じ高値なり、享保十七<sup>壬</sup>子<sup>子</sup>年大虫腐<sup>かみ</sup>より二十五年めなり。

一、明和六<sup>己</sup>丑<sup>丑</sup>年秋作よろしからず、翌寅の春穀類高直なり、宝曆八<sup>戊</sup>亥<sup>亥</sup>年より十五年めなり。

一、天明二<sup>壬</sup>寅<sup>寅</sup>年夏より秋辻雨繁く虫病もあり大風三度吹田島ともに實少く翌卯の三月頃より七月辻穀類次第に高直になりぬ、よって直段左に記置ぬ

一、米沓俵 代貳貫八百七十文<sup>の</sup>三貫四百三十文<sup>迄</sup>  
三斗七升入

一、 太米 壹俵 代貳貫五百九十文分貳貫九百七十五文込

一、 大麦 壹俵 代三斗七升入 三斗七升入 代貳貫四百七十文分壹貫六百十文込

一、 小麦 壹俵 代四斗入 四斗入 代貳貫八百五十五分貳貫百文込

一、 はたか麦 壹俵 代三斗七升入 三斗七升入 代貳貫八百五十五分貳貫三十文込

右之直段卯の麦作實少キゆへ夏中穀類高直なり、それ過キ秋收納前ニ至リ少、下直ニなりぬ。然共穀類多

事なし

一、 大豆 壹俵 代貳貫八百廿文 三斗五升入

一、 小豆 壹俵 代貳貫八百廿文 三斗五升入

一、 大麦 壹俵 代貳貫五百文 四斗入

一、 からいも 百斤 代八百八十文

一、 くり綿 壹貫目 代三貫百五十文

一、 錢遣イ 壹匁 七十文なり

一、 文銀 壹匁 九十八文替

一、 文金 壹両 六貫文位

右寅の年田畠ともに諸国一統によろしからざる歟、聞し直段何国も大違イなし、享保十七壬子年秋大虫腐ハ天明二壬寅年の秋損毛迄五十一年めなり。

一、 天明三癸卯年秋作損毛ゆへ、翌辰の春穀類高直なり。直段左に記置ぬ。



一、米壹俵 代三貫五百七十文  
三斗七升入

一、太米壹俵 代二貫九百五十文  
三斗七升入

一、小麦壹俵 代貳貫八百文  
三斗七升入

一、大豆壹俵 代貳貫四百五十文  
三斗五升入

一、小豆壹俵 代貳貫六百文  
三斗五升入

右之穀類はかりにて外の雜穀は多事なきゆへ、別而調得難く、誠に大難儀なり

一、天明<sup>甲</sup> 辰年二月十二日辰下刻より未半刻迄出火にて、左之通焼失致候

上本町、磯町、伽藍町、新町、町家表口三百幹余

御茶屋并御廩共<sup>二</sup>

御茶屋之内、會所壹軒、御郡代衆御詰宅壹軒、御番宅并長屋共<sup>二</sup>

右之通類焼致候

一、天明六<sup>丙</sup> 壬午年中 長洌御茶屋建

一、享保十八<sup>癸</sup> 丑年之春 大飢饉<sup>ニ</sup>付原万田村窮飢人救

条被仰付<sup>ニ</sup>付左之通出<sup>シ</sup>候

人数七十五人 日数五十日分

合大麦拾壹石貳斗五升但し屯人<sup>ニ</sup>付一日<sup>ニ</sup>三合宛

此頃 御惣庄屋 荒尾市右衛門殿

原万田村庄屋 市左衛門

同村頭百姓 平右衛門

一、享保二十一<sup>丙辰</sup>年長洲町人高男女合三千百三拾七人有此年より天明四<sup>甲辰</sup>年に至り人高男女三千七百七人程有、然者年数四十九年を経て五百六拾三人程増したり、後年<sup>に</sup>至りても増<sup>ヌ</sup>年はかりに而、減する年も有へき歟。計難きは、浮世なり、是によつて記置ぬ

一、天明四<sup>甲辰</sup>年春大飢饉依之長洲町窮飢人救米出<sup>レ</sup>度由願上候而七十文錢式貫目出<sup>シ</sup>申候  
此春三斗七升入米壹俵代錢三貫五百七十文但し雜穀之類此之直段ニ準し高直なり

此頃 御郡代 井澤慶助殿

岡崎猪左衛門殿

御惣庄屋 井上寿右衛門殿

長洲町庄屋 惣右衛門

同所別当 勘助

右之通救方差出<sup>シ</sup>候<sup>ニ</sup>付天明四年辰九月廿七日熊本御役所<sup>江</sup>被召出、苗字帯刀之御郡代御直触被仰付候  
御郡代衆<sup>ハ</sup>被渡下候御書附左之通<sup>但</sup>し御書付は別紙<sup>ニ</sup>在

長洲町 丈八

右者当春為救親十助<sup>ハ</sup>寸志又者救方<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>鳥目雜穀差出<sup>シ</sup>奇特之由<sup>ニ</sup>付苗字帯刀之御郡代直触被仰付也。

一、寛政六<sup>甲寅</sup>年二月十七日、長洲町庄屋役馬場助左衛門<sup>江</sup>被仰付御差紙御渡<sup>シ</sup>被成候。

此時之 御惣庄屋 井上太右エ門殿

御郡代 白石清兵衛殿

増田角助殿

右御差紙者 長洲会所<sup>二</sup>而 増田角助殿御渡被成候

一、天明四<sup>甲</sup>辰年九月廿七日亥下刻より丑下刻迄出火<sup>二</sup>而 下本町・東平・西平・表口家数三十七軒程焼失

一、天明五<sup>己</sup>年正月廿四日同廿五日井土堀石築直す

但し二日に人数二十八人の手入り申候なり、此時井柳替申候

石工となり徳次

但し井桁式尺七寸方

一、天明八<sup>戊</sup>申年正月八日むかへ屋敷井土堀<sup>但し</sup>井桁式尺七寸

石工 同人

一、天明六<sup>丙</sup>午年秋作、翌七年<sup>丁</sup>未之麦作まで、諸国一統之損毛これ大風不吹虫痛<sup>三</sup>而もなし、午の秋冬より

未の春夏はしめ込雨繁故の損毛なり、夫故、穀類高直なり、御隣も所により直段の高下有之候、長洲近

方之直段左ニ記す

但し穀類他国出方御停止なり

一、米壺升 代百三十文 一、太米壺升 代百十文

一、粟米壺升 代百三十文 一、大麦壺升 代五十二文半

一、小麦壹升 代八十二文 一、はたか麦壹升 代七十六文

一、大豆壹升 代六十文 一、小豆壹升 代七十二文

一、蕎麦壹升代七十六文 一、繰綿一貫目代七十二文右末の春より、盆前後迄には直段少々宛の高下有となり。

右之通<sup>二</sup>付未の春御囲の靱被下候<sup>二</sup>付、麦作迄取付候処<sup>二</sup>麦作不實<sup>二</sup>付盆前後<sup>三</sup>至り、売方穀類無多事、それゆへ所々より願上<sup>二</sup>付而御蔵之穀類代銀上納下直<sup>二</sup>而被下候故、漸秋作出来迄兎や角と凌暮<sup>ら</sup>けり、右之通大難儀致候得共五十六年前之子の虫腐<sup>二</sup>而丑之春之様<sup>二</sup>飢死はなし

享保十七<sup>壬子</sup>年より天明六<sup>丙午</sup>年の年まで五十五年<sup>二</sup>成ル、然者五十年前後には、作方必定損毛いたし飢饉の年あり是天地の間にはいかなる道理のましましてかく難儀なる年ありけるにや、よつて記置ぬ

一、天明七<sup>丁未</sup>年秋作田畑共<sup>二</sup>諸国一統に十分の出来、此秋大風不吹洪水出す、これをもつて四恩の厚大、天を唯々貴へし<sup>く</sup>となり。

うへのない 雨露の恩 慈悲や月日と

一、松平大炊頭様嶋原<sup>江</sup>御入郡被遊候、翌年寛文十<sup>寅戌</sup>年<sup>今</sup>御用向先祖与次兵衛勤めしの、それよりは子助左衛門、それよりは子助左衛門寛延<sup>二</sup>己年迄三代年数合八十年奉勤しなり。

一、松平大和守様安永三<sup>甲午</sup>年御旧領嶋原<sup>江</sup>御所替被為仰依之<sup>己</sup>前之通御用向奉勤候様彼方様改メ御役人大田兼右衛門殿、安藤柱予殿<sup>今</sup>御紙面を以被仰下候<sup>二</sup>付、此段御惣庄屋荒尾寿右衛門殿<sup>江</sup>相達此年<sup>今</sup>天明五<sup>乙巳</sup>年迄年数合十二年十助奉勤しなり

一、天明八<sup>戊</sup>申年正月晦日<sup>ろ</sup>二月朔日<sup>ろ</sup>迄京都大火事、此時御内裏焼失

一、天明九<sup>己</sup>酉年正月十二日衣亥半刻頃<sup>ろ</sup>子半刻迄出火表口家三十二軒程致焼失候

四神相應の地と申すは

左 蒼龍 右 白虎

前 朱雀 後 玄武

一、松平主計頭様寛政四年<sup>壬</sup>子五月十四日御逝去被遊、御遺骸六月廿六日嶋原御出棺<sup>二</sup>而参列 弥構<sup>江</sup>御越御

通行筋<sup>ハ</sup>肥前路なり

一、松平主計頭様御家督、主計頭様と御改名被遊、寛政五年<sup>癸</sup>丑四月廿一日嶋原<sup>江</sup>御入郡被遊候。御通行筋者

肥前路なり

(資料提供 馬場專一氏)



## 長洲町年表

| 五七                        |  |   |   | 西<br>曆           |
|---------------------------|--|---|---|------------------|
|                           | 古墳時代   | 弥生時代  | 縄文時代  | 元<br>号           |
|                           |  |   |   | 主<br>要<br>事<br>項 |
| 倭の奴国王、後漢に朝貢して、光武帝より印綬を受ける | 折地の大辻から石斧が出土<br>折地地区<br>宮崎地区からは須恵器、葛輪地区からは須恵器と馬の埴輪が出土<br>葛輪、宮崎地区 | 六栄地区<br>鷺巣、永方、向野の各地から弥生式土器や土師器 <small>はじき</small> が出土 | 腹赤新町の台地と深田浦から多数の縄文土器が発見され今から六〇〇〇年位前には人が住んでいたと推定される<br>堀崎貝塚<br>駅通りから多数の縄文土器が出土 |                  |

|     |            |  |
|-----|------------|--|
| 一八八 | 堆古 一       | 卑弥呼邪馬台国の女王となる  |
| 五九三 | 聖徳太子、摂政となる |  |
| 六四五 | 大化 一       | 大化の改新  |
| 六六三 | 天智 二       | 白村江 <small>はくすのえ</small> の戦い                                 |
| 六七二 | 弘文 一       | 壬申 <small>みづみ</small> の乱                                     |
| 七〇一 | 大宝 一       | 大宝律令の制度  |
| 七一〇 | 和銅 三       | 平城京に遷都   |
| 七二二 | 々 五        | 「古事記」できる   |
| 七二三 | 々 六        | 「風土記」できる   |
| 七一八 | 養老 二       | 養老律令成る   |
| 七二〇 | 々 四        | 日本書紀できる  |
| 七四三 | 天平一五       | 元日の節会に腹赤 <small>はらに</small> の贄 <small>にえ</small> を太宰府より朝廷に奉る |
| 七五二 | 天平勝宝四      | 東大寺大仏開眼  |
| 七九四 | 延暦一三       | 平安京に遷都   |
| 七九七 | 々 一六       | 「続日本紀」できる  |
| 八四〇 | 承和 七       | 疋野神社、官社に定められる  |



|      |     |   |
|------|-----|---|
| 九〇一  | 延喜一 | 菅原道真、太宰府に流される                             |
| 九三二  | 承平二 | 腹赤深田浦に名石宮創建                               |
| 九三九  | 天慶二 | この頃野原庄ができる<br>野原八幡宮創建                     |
| 一〇七〇 | 延久二 | 続いて二宮八幡宮を高浜に勧請                            |
| 一一一四 | 永久二 | 菊池則隆 肥後にくだる                               |
| 一一五六 | 保元一 | 「中右記」に野原荘の荘名がみえる                          |
| 一一六〇 | 永暦一 | 樺村に樺山賀庭寺創建                                |
| 一一六九 | 嘉応一 | 長洲に三人の開拓僧が扇崎より移住したという                     |
| 一一八一 | 養和一 | 長洲浜に四王子神社を奉祀したと伝えられる                      |
| 一一八五 | 寿平四 | 玉名出身の皇円上人歿す                               |
| 一一九二 | 建久三 | 菊池隆直の反乱                                   |
| 一一九三 | 々四  | 壇の浦に平氏滅ぶ                                  |
| 一一九五 | 々六  | 鎌倉幕府成立<br>紀国隆、玉名郡大野別符地頭となる<br>中原親能鎮西奉行となる |

|      |      |                                     |
|------|------|-------------------------------------|
| 一一〇四 | 元久一  | 折地天満宮の創建                            |
| 一一二一 | 建暦一  | 俊苧 <small>（とむ）</small> 、小岱山に正法寺を建てる |
| 一一二四 | 文保一  | 親鸞が浄土真宗をひらく                         |
| 一一四七 | 宝治一  | 小代重俊、野原莊地頭職を命ぜられる                   |
| 一一五二 | 建長四  | 野原八幡宮祭事簿が書き始められる                    |
| 一一六二 | 弘長二  | 野原莊は東郷と西郷に分けられ、長洲地方は東郷に属する          |
| 一一七四 | 文永一一 | 蒙古来襲（文永の役）                          |
| 一一七六 | 建治二  | 宮内出目に浄業寺 <small>（じやうごう）</small> が建つ |
| 一一一五 | 正和四  | 宮崎村西屋敷に長洲最古の五輪塔建つ                   |
| 一一三三 | 元弘三  | 鎌倉幕府亡ぶ                              |
| 一一三五 | 建武三  | 尊氏九州に入り、南北朝の戦乱おこる                   |
| 一一四七 | 正平二  | 清源寺、高瀬にうつる                          |
| 一一五九 | 〃一四  | 筑後川の戦いで菊池氏大勝す                       |
| 一一七三 | 文中二  | 小代重政に伊倉大野庄を与えられる                    |
| 一一七五 | 天授一  | 水島合戦で菊池氏が探題勢を破る                     |
| 一一七八 | 〃四   | 託麻原で菊池武朝が探題勢を破る                     |

|      |      |                           |
|------|------|---------------------------|
| 一三九一 | 明德二  | 長洲町に明德碑が建つ                |
| 一三九二 | 々三   | 南北朝合一                     |
| 一四〇六 | 応永一二 | 探題勢と菊池氏、袴嶽城や米生（大牟田）地方で戦う  |
| 一四三二 | 永享四  | 菊池氏と探題勢、筒が嶽城で戦う           |
| 一四三八 | 々一〇  | 菊池氏と探題勢の戦い終わる             |
| 一四六〇 | 寛正一  | 菊池武邦、玉祥寺に倉満・牛水村の田畑を寄進する   |
| 一四六七 | 応仁一  | 応仁の乱起こる（↓一四七七）            |
| 一四八四 | 文明一六 | 永方に角塔婆をたてる                |
| 一四九一 | 延徳三  | コロンブス、アメリカ大陸を発見する         |
| 一四九四 | 明応三  | 宗祇、「新撰菟玖波集」を編集する          |
| 一五一六 | 永正一〇 | この頃より野原庄の農民惣村をおこす         |
| 一五二三 | 大永三  | 三月、大友・阿蘇連合軍が小代重忠と菊池武包を攻める |
| 一五二六 | 々五   | 平原神社創建                    |
| 一五二九 | 享祿二  | 三池の仏師周養、古屋敷に板碑を建てる（御腰石）   |
| 一五三三 | 天文二  | この頃、野原庄に伊勢信仰おこる           |
| 一五四三 | 々一二  | 鉄砲伝来                      |

|      |      |   |
|------|------|---|
| 一五四六 | 天文二五 | 周養、向野七社宮に阿弥陀如来板碑、赤崎観音堂に聖観音板碑を建てる            |
| 一五五〇 | 〃 一九 | 小代実忠が梅尾城に反大友勢にかこまれる                         |
| 一五五七 | 弘治 三 | 小代実忠に長洲鮎 <small>はらか</small> (腹赤) 一一町分が与えられる |
| 一五七三 | 天正 一 | 上沖洲名石宮境内にいは石板碑建つ                            |
| 一五七四 | 〃 二  | 室町幕府終わる                                     |
| 一五七七 | 〃 五  | 腹赤天満宮創建                                     |
| 一五八〇 | 〃 八  | 向野七社宮が創建されたという                              |
| 一五八一 | 〃 九  | 肥前軍、長洲海岸に上陸す                                |
| 一五八二 | 〃 一〇 | 焼石・金山原に小代、大野両氏が戦う                           |
| 一五八三 | 〃 一一 | 本能寺の変                                       |
| 一五八七 | 〃 一五 | 一月、肥前龍造寺氏の水軍が鳥津の水軍を荒尾の大島沖に破る                |
|      |      | キリスト教を禁止                                    |
|      |      | 四月、秀吉、南関に駐留、隈本、出水に向う                        |
|      |      | 六月、秀吉、小代氏に二〇〇町歩を与える                         |
|      |      | 六月、秀吉、佐々成政に肥後一円を与える                         |
|      |      | 八月、国衆一揆おこる                                  |

|      |      |   |
|------|------|---|
| 一五八七 | 天正一五 | 九月六日秀吉、小代氏に安堵状を渡す                                       |
| 一五八八 | 〃 一六 | 秀吉、佐々成政を処刑する  |
| 一五九〇 | 〃 一八 | 秀吉、肥後北部を加藤清正に、南部を小西行長に与える                               |
| 一五九一 | 〃 一九 | 秀吉、北条氏を降し、全国を統一する                                       |
| 一五九二 | 文祿 一 | 永方信定寺ができる<br>文祿の役おこる                                    |
| 一六〇〇 | 〃 五  | 朱印船制を設ける<br>関ヶ原の戦い                                      |
| 一六〇一 | 慶長 六 | 清正、肥後全土の領主となる   |
| 一六〇二 | 〃 七  | 清正が洲崎大明神の境内に松山をつくる（縦二〇間、横二三間）<br>柳川城主、立花宗茂の妻ギン千代が腹赤にて死す |
| 一六〇三 | 〃 八  | 「光昭院殿泉譽良清大姉」の墓がある（ぼたもちさん）                               |
| 一六〇四 | 〃 九  | 徳川家康、幕府を開く<br>行末塘工事が行われる                                |
| 一六〇六 | 〃 一一 | 古塘、菜切塘、塩屋塘の工事おこなわれる                                     |

|      |      |   |
|------|------|---|
| 一六〇七 | 慶長二二 | 清正が新山の海岸五六〇間に松を植える                        |
| 一六一一 | 〃一六  | 大恩山正福寺を清源寺に建てる                            |
| 一六二二 | 〃一七  | 清正死す                                      |
| 一六一五 | 元和一  | 腹赤村にてキリシタン禁制のため人畜改めがおこなわれる<br>大阪夏の陣、豊臣氏滅ぶ |
| 一六三二 | 寛永九  | 名石宮、上沖洲に遷宮<br>加藤忠広、出羽の国に流さる               |
| 一六三三 | 〃一〇  | 細川忠利、小倉より熊本城に入る                           |
| 一六三七 | 〃一四  | 折地に阿弥陀寺再建                                 |
| 一六三七 | 〃一五  | 鳥原の乱起こる<br>天草渡海用船の調査がおこなわれる               |
| 一六四一 | 〃一八  | 荒尾弥左衛門、荒尾手永の初代惣庄屋となる                      |
| 一六四五 | 正保一  | 腹赤村にて天草島原へ派遣のための人畜改めが行われる                 |
| 一六四九 | 慶安二  | 腹赤安正寺建立                                   |
| 一六五二 | 〃五   | 永方一先宮建立<br>西光寺建立                          |

長洲町年表

|      |      |                               |
|------|------|-------------------------------|
| 一七六〇 | 一〇   | 鳥原公、国替えの途中馬場十助宅に宿泊さる          |
| 一七五九 | 〃 九  | 一月三日長洲町大火（四〇軒焼失）              |
| 一七五七 | 〃 七  | 長洲町六斉市ひらかる                    |
| 一七五六 | 宝曆 六 | 野原、金山で石炭試掘の願いが出される            |
| 一七四八 | 寛延 一 | 肥後藩細川重賢藩主となり、藩政改革にのりだす（宝曆の改革） |
| 一七三七 | 元文 二 | 一二月二〇日長洲町大火（二〇軒焼失）            |
| 一七三〇 | 〃 一五 | 上沖洲に七六体目の放牛地蔵が建つ              |
| 一七一六 | 享保 一 | 享保の改革（徳川吉宗）                   |
| 一七〇三 | 〃 一六 | 二月五日、長洲町大火のため殆んど焼失            |
| 一七〇二 | 〃 一五 | 長洲に町奉行所できる（まもなく廃止される）         |
| 一六九〇 | 〃 三  | 長洲三間町に長光寺建立                   |
| 一六八九 | 〃 二  | 長洲町は人口が増加し裏町をつくる              |
| 一六八八 | 元祿 一 | 長洲に清台寺建立                      |
| 一六七一 | 〃 一  | 清源寺に立徳寺建立                     |
| 一六六四 | 寛文 四 | 新塘を築く                         |
| 一六五七 | 明暦 三 | 宮崎の光正寺建立                      |

|      |      |                            |
|------|------|----------------------------|
| 一七六四 | 明和 一 | 三月一〇日長洲町火災（一二軒焼失）          |
| 一七六六 | 〃 三  | この頃、長洲町で鯨油を稲の除虫剤に使う        |
| 一七七八 | 安永 七 | 馬場十助「長洲旧事記」を記述す            |
| 一七七九 | 〃 八  | 二月七日長洲町火災（一一軒焼失）           |
|      |      | 一〇月に又もや大火（一二〇軒焼失）          |
| 一七八四 | 天明 四 | 二月一二日長洲町大火（三二四軒焼失）         |
|      |      | 九月二七日長洲町大火（三七軒焼失）          |
| 一七八七 | 〃 八  | 寛政の改革はじまる（松平定信）            |
| 一七八九 | 〃 九  | 一月一二日長洲町大火（三三軒焼失）          |
| 一七九二 | 寛政 四 | 雲仙岳が爆発し、長洲沿岸は津波のために大被害を受ける |
|      |      | （流失家屋一八二〇軒、死者二二八〇人、上沖洲全滅）  |
| 一八一〇 | 文化 七 | 伊能忠敬、肥後を測量                 |
| 一八一七 | 〃 一四 | 三ヶ村開（腹赤、上沖洲、清源寺一六町二反余）     |
| 一八二五 | 文政 八 | 外国船打ち払い令出る                 |
| 一八二八 | 〃 一一 | 一二月、行末塘石造眼鏡橋ができる           |
| 一八二九 | 〃 一二 | 長洲漁港が開かれたという               |



|      |      |  |
|------|------|--|
| 一八三二 | 天保 二 | 長洲町を上町、下町に分ける  |
| 一八三三 | 〃 四  | 古塘、菜切塘、塩屋塘の井樋が眼鏡石橋となる  |
| 一八三七 | 〃 八  | 鷲巢、新堤できる（狐谷）   |
| 一八三九 | 〃 一〇 | 関忠之允が新山墓地北側の烏牟田井樋をつくる  |
| 一八四一 | 〃 一二 | 天保の改革はじまる（水野忠邦）  |
| 一八四八 | 嘉永年間 | 六月一日長洲町大火（二七六軒焼失）  |
| 一八五四 | 安政年間 | 嘉永川が浦川の放水路として町の中央にほられる   |
| 一八五七 | 安政 四 | 月田蒙齊 私塾を開設する（↓一八五九）  |
| 一八六七 | 慶応 三 | 上沖洲新開（三〇町四反余）  |
| 一八六九 | 明治 二 | 大政奉遷   |
| 一八七〇 | 〃 三  | 版籍奉遷   |
| 一八七一 | 〃 四  | 手永制を改め、郷組制を布く  |
| 一八七二 | 五    | 長洲は荒尾郷に入る 組の長を里正、村の長を与長という<br>廃藩置県<br>一二月に戸籍調査のため、大小区制が布かれる<br>清正寺建立 |

|      |      |  |
|------|------|--|
| 一八七三 | 明治 六 | 学制発布<br>徴兵令布告<br>地租改正条例を布告                     |
| 一八七四 | 七    | 長洲郵便取扱所開設（集配区域に荒尾、有明、平井も入る）<br>牛水小学校・高梅小学校ができる |
| 一八七五 | 八    | 上沖洲小学校・腹赤小学校・清源寺小学校ができる                        |
| 一八七六 | 九    | 向野小学校・永方小学校ができる<br>育幼堂がもとで長洲小学校開設              |
| 一八七七 | 一〇   | 長洲に高瀬警察署長洲仮分署設置<br>戸長征伐の一揆起こる<br>西南戦争起こる       |
| 一八七九 | 一二   | 大小区制を廃して郡区とする                                  |
| 一八八五 | 一八   | 向野小学校・永方小学校が合併して向永小学校となる                       |
| 一八八六 | 一九   | 長洲町で新暦を使うようになる<br>日感寺建立                        |
| 一八八九 | 二二   | 大日本帝国憲法発布                                      |

|      |      |   |
|------|------|---|
| 一八八九 | 明治三二 | 町村合併により清里村、六栄村、腹赤村ができる                  |
|      |      | 七月二三日長洲町大火（四四軒焼失四〇余軒半焼）                 |
| 一八九〇 | 明治三三 | 上沖洲小・腹赤小・清源寺小学校が合併して名石小学校となる            |
|      |      | 第一回衆議院議員選挙実施                            |
|      |      | 教育勅語発布                                  |
| 一八九一 | 〃二四  | 長洲町に熊本地方事務局長洲出張所と高瀬区裁判所長洲出張所設置          |
|      |      | 九州鉄道株式会社が長洲駅を開設し高瀬まで鉄道が開通する（四月一日）       |
|      |      | 七月一日に熊本（春日駅）―高瀬間開通                      |
| 一八九二 | 〃二五  | 名石小学校より上沖洲小学校が分立する                      |
| 一八九三 | 〃二六  | 一〇月一三日の台風で長洲漁民が遭難し、漁船一九〇隻を喪失・溺死者三八四人を出す |
| 一八九四 | 〃二七  | 日清戦争始まる                                 |
|      |      | 向永小学校を六栄小学校と改称する                        |
| 一八九五 | 〃二八  | 六月二日の台風で長洲漁民二九名が遭難する                    |
| 一八九六 | 〃二九  | 一月一四日長洲町出町に西洋風の高瀬警察署、長洲分署が置かれた          |
| 一八九八 | 〃三一  | 消防組に組頭、小頭、消防手等の名称が与えられた                 |

|      |       |   |
|------|-------|---|
| 一八九八 | 明治三一  | 名石小学校・上沖洲小学校が合併して腹赤小学校となる   |
| 一九〇〇 | 〃 三三三 | 長崎県南高来郡三会村と長洲町間に海底電信敷設<br>産業組合ができる  |
| 一九〇一 | 〃 三四  | 「翠汀会」誕生   |
| 一九〇三 | 〃 三六  | 岡村喜満太貴族院議員となる   |
| 一九〇四 | 〃 三七  | 隔離病舎を建設   |
| 一九〇四 | 明治三七  | 日露戦争始まる   |
| 一九〇五 | 〃 三八  | 五月一日長洲町で民声クラブが社会主義街頭演説会を開き、示威運動を起こす   |
| 一九〇六 | 〃 三九  | 上沖洲に塩の専売局出張所ができる  |
| 一九〇七 | 〃 四〇  | 長洲町で松隈勇ら社会主義學術演説会を開く  |
| 一九〇八 | 四一    | 六月漁網業の江崎会社が長洲町に設立された  |
| 一九一〇 | 〃 四三  | 与謝野鉄幹、北原白秋等五人の詩人が長洲港に上る（紀行文「五足の靴」）<br>清里村火災（一六軒焼失）<br>牛水小学校と高梅小学校が合併して、清里尋常高等小学校ができる<br>松村時次貴族院議員となる<br>一木齊太郎死去 |

|      |      |  |
|------|------|--|
| 一九一〇 | 明治四三 | 塩田廃止   |
| 一九一二 | 々 四五 | 前浜耕地整理組合ができる   |
| 一九一四 | 大正 三 | 第一次世界大戦始まる（↓八年）  |
|      |      | 高潮来襲 新塘決壊  |
|      |      | 高潮来襲、新塘再び決壊する  |
| 一九一八 | 々 七  | 長洲町に電灯がつく  |
| 一九二〇 | 大正 九 | 長洲町役場に電話開通   |
| 一九二五 | 々 一四 | ラジオ放送開始  |
| 一九二九 | 昭和 四 | 世界恐慌始まる  |
| 一九三三 | 々 八  | 三ヶ年継続事業として、港湾の整備行なわれる  |
| 一九三七 | 々 一二 | 日中戦争始まる  |
| 一九三八 | 々 一三 | 長洲に火葬場、塵埃焼却場建設   |
| 一九三九 | 々 一四 | 善証寺建立  |
| 一九四〇 | 々 一五 | 四ヶ年継続事業として避難港、漁港としての長洲港修築工事を施行<br>政党を解消して大政翼賛会ができる<br>上沖洲大火（五三軒焼失） |

|      |      |   |
|------|------|---|
| 一九四一 | 昭和一六 | 国民学校令施行<br>大東亜戦争が始まる                              |
| 一九四二 | 〃一七  | 光智寺建立<br>米の配給始まる                                  |
| 一九四五 | 〃二〇  | 荒尾市誕生<br>米軍戦斗機による空襲で、一名長洲駅で死亡                     |
| 一九四六 | 昭和二〇 | 八月一五日終戦<br>新選挙法による第二回総選挙実施、婦人代議士誕生                |
| 一九四七 | 〃二二  | 市町村農地委員選挙実施<br>三か年計画長洲港改修工事<br>新学制スタート、新制中学発足     |
| 一九四八 | 〃二三  | 市町村独立消防条例により消防団を編成する<br>五月三日日本国憲法発布<br>市町村自治体警察発足 |
| 一九五〇 | 〃二五  | 新制高校発足<br>尺八の名人吉田晴風死去                             |

|      |      |  |
|------|------|--|
| 一九六一 | 〃 三六 | 有明製鉄が熊本市で有明海の砂鉄を利用して製鉄を開始<br>天皇、皇后両陛下が有明フェリーで長洲港に上陸され、長洲駅より乗車される<br>九州井上ゴム化学株式会社が梅田に進出 |
| 一九六四 | 〃 三九 |  |
| 一九六六 | 〃 四一 | 長洲清里、六栄、腹赤の三農協が合併して長洲町農協となる  |
| 一九六七 | 〃 四二 | 国鉄の電化・複線化する  |
| 一九六九 | 〃 四四 | 九州不二サッシ株式会社進出  |
| 一九五一 | 昭和二六 | 警察法改正で、国警本部が自治体警察を吸収   |
| 一九五五 | 〃 三〇 | 七月二〇日清里村の梅田、駅通り、建浜の三区が長洲町に合併する<br>八月二六日荒尾市長洲町小中学校組合が開設され、清里小・清里中は組合立となる                |
| 一九五六 | 〃 三一 | 翌三一年四月、清里小は長洲町立となる、清里中は長洲中に統合される<br>腹赤村と六栄村が合併して腹赤村となる                                 |
| 一九五七 | 〃 三二 | 一〇月一日 長洲町と腹赤村が合併して長洲町となる   |
| 一九五八 | 昭和三三 | 長洲―多比良間に有明海自動車航送船開通（有明フェリー）  |
| 一九六〇 | 〃 三五 | 長洲町で上水道一部通水開始<br>三井三池炭坑争議始まる   |

|      |      |                           |
|------|------|---------------------------|
| 一九七二 | 昭和四七 | 有明消防組合発足                  |
| 一九七四 | 々 四九 | 長洲町章できる                   |
|      |      | 日立造船有明工場竣工                |
|      |      | 名石浜関連企業用地埋立完成             |
| 一九七五 | 々 五〇 | 長洲小学校創立百周年                |
| 一九七六 | 昭和五一 | 東洋サッシ進出                   |
| 一九七七 | 々 五二 | 姫ヶ浦の埋立完成                  |
| 一九七七 | 昭和五二 | B & G長洲海洋センターできる          |
|      |      | 金魚養殖百年祭                   |
|      |      | 日立造船で五〇万トン タンカーできる (有明工場) |
| 一九七八 | 々 五三 | 文化センターできる                 |
|      |      | 町役場新庁舎できる                 |
| 一九七九 | 々 五四 | 公共下水道終末処理場建設はじまる          |
| 一九八一 | 々 五六 | 健康福祉センターできる               |
| 一九八二 | 々 五七 | 長洲岱明清掃センター完成              |
| 一九八五 | 々 六〇 | 町花に「キンギョソウ」町木に「クロガネモチ」を決定 |



長洲町年表

|  |                               |
|--|-------------------------------|
|  | <p>一九八五<br/>一九八六<br/>一九八七</p> |
|  | <p>昭和六〇<br/>〆六一<br/>〆六二</p>   |
| <p>六栄小学校百周年<br/>下水道供用開始<br/>町民研修センター完成<br/>町民憲章できる<br/>町村合併三〇周年記念式典<br/>長洲町史発刊</p> |                               |



執筆編集者

|           |       |
|-----------|-------|
| 原始、古代     | 中島 巖  |
| 古代、中世     | 福島 作藏 |
| 近世        | 前田哲之助 |
| 近代、現代     | 林田 幸昌 |
| 神社、仏閣、その他 | 越智 春一 |
| 民俗        | 竹本 繁  |
| 植物        | 池田 三次 |

長洲町史

昭和六十二年九月二十五日印刷  
昭和六十二年十月一日発行

編纂者 長洲町史編纂委員会

長洲町中央公民館内

発行者 長洲町長 宮田 靖次

印刷所 中央印刷紙工棟

熊本市田崎二丁目五番三八

電話(〇九六)三五四一四一九一

七八六〇